

ヘンリー・ジェイムズ『信賴』

水野尚之 訳

第二十五章

ゴードンはバーナードの腕を取った。彼らは通りを歩きだした。シャンゼリゼ^①の方へ進んでいった。

「ちょっとした運動とたっぶりの会話をするには、ここは最高の場所だよ」ゴードンは言った。「言いたいことがたくさんあるし、君に尋ねたいこともたくさんある」

友人の手が腕に置かれた時、バーナードはその手の懐かしい重みを感じた。ただ、これほどの重みで置かれたことはなかったようにも思われた。その手は彼をしっかりと掴んだ。それは説明するために彼を掴んだのだ。それは責任というものを身体で象徴しているように見えた。話すことがたくさんあるとゴードンが言うのを聞いても、バーナードは安心しなかった。ブランチの矯正したい愚行という件について、怒りが突然爆発するのではないかと思ったのだ。午後の日はすばらしかった。その日は、秋のこの上なくつろいだ大気の完璧な例だった。空気は暖かく、金色のもやに満ちていた。もやは、パリの剥きだしの木々を覆いたいという優しい衝動に駆られたかのように、木々のまわりに漂っていた。パリの快晴に誘われて、鮮やかに明るく感謝に溢れたたくさんの人々

が、散歩やそぞろ歩きをするために通りに出てきていた。シャンゼリゼの開放的な空間は、このような場合、フランスの首都に数多くいる金のかからない娯楽を楽しむ穏やかな人々で溢れていた。大通りの端にあるベンチや椅子には、見物客たちがぎっしりと仲良く座っており、幅広い大通りには歩行者たちがゆっくりと何にでも喜びながら行き来していた。話したいことがたくさんあると言っていた割には、ゴードンはしばらく取りとめのない話しかしなかった。バーナードはしばらくして、ゴードンがさしあたり夫婦の不仲といった話題を出しそうにないと分かって満足した。実際ゴードンはどんな風にもブランチのことを話したくないようだった。彼はその時その場の雰囲気に入り、群衆を見てたわいのないことを話した。パリはやはり素晴らしいところであり、パリの風景をちょっと見るだけでも大いに気分転換になると言った。また、ここへやってきてとても嬉しい、自分としては三ヶ月はここにいたいと言った。

「君は何をしていたんだい」彼は言った。「どんな仕事をしていて、何をするつもりなんだ」

バーナードはしばらく何も言わなかった。やがてゴードンは、なぜ黙っているのか知ろうとバーナードの顔をちらと見た。横目で見たバーナードは、友人と目が合った。そして友人の目を見ながら立ち止まった。心臓は高鳴っていた。「アンジェラ・ヴィヴィアンと婚約するという仕事で忙しかった」とゴードンにきっぱりと言うべきだった。彼にはそれが言えなかった。とはいえ何か言わねばならなかった。何かをでっちあげようとしたが、何も思いつかなかった。ゴードンはまだ彼を見ていた。

「君に会えて本当に嬉しいよ！」他にうまい言い方もなく、バーナードは大きな声で言った。そう言いつつ、彼は顔を赤らめた。馬鹿のようであって、嘘臭くも思えた。

「そうだね、バーナード！」彼らは歩き続け、ゴードンは嬉しそうにつぶやいた。「君がそう言ってくれてあり

がたい。また一緒になれて嬉しいよ。ちょっと言いたいことがあるんだ」彼は少ししてつけ加えた。「君が気を悪くしないといいんだが」友人がためらうのを見て、バーナードはちょっと笑った。ゴードンは続けた。「本当のことを言うと、僕たちは昔ほどいい友人ではなくなったんじゃないか、僕たちの間に何かが入り込んだんじゃないか、と思う時があったんだ。それが何なのか、またなぜそうなったのかは分らない。一種熱が下がったとか言い方が分らない。君がそう感じたかどうかは知らないし、僕の思い過ごしにすぎないかもしれない。それが何だったのであれ、もう終わったよね。僕たちはあまりにも古くからの友人であり、あまりにも仲が良いので、くっつかないわけにはいかないんだ。もちろん人生の障害がその粘着力をゆるめることが、時々はあるかもしれない。でも、直接少し会ってみればその粘着力が容易に回復するだろう、と感じるのはまったくすばらしいことだ。そうじゃないかい。でもそんなことは理屈で考えることじゃない。そう感じるのだ。それで十分さ」

ゴードンは澄んだ陽気な声で話した。バーナードは真剣に聞いた。友の話には苦痛や努力の底流があるように思えた。賢明になろう、苦しみをなんとか我慢しようとする不幸な男の底流だった。

「ああ、人生の障害、人生の障害か！」バーナードはぼんやりと繰り返した。

「僕たちはそんなものを気にしてはいけない」ゴードンは良心的な笑いを浮かべて言った。「僕たちは自分の皮を鍛えなくてはならない。最悪でも、自分の傷に何か塗らなくてはならない。だが、人生の苦痛について話すのに、どうしてわざわざこんな場所と時を選ばなければならないんだ」彼は続けた。「楽しみ事の真ただ中にいるんじゃないのか。つまり、これからその楽しみを味わうという意味だが。バーナード、君の現在の楽しみ事は何だい。パリでは楽しまねばならない、と思われているんじゃないのか。君はどうやって楽しんできたんだい」

「僕は大変静かな生活を送ってきた」バーナードは言った。

「それこそ人が特別な発散をした時にいつも言うことだと思うな。君は何をしたんだい。僕が知っている誰に会ったんだ」

バーナードはしばらく黙っていた。

「君の旧友たちに会った」彼はとうとう言った。「ヴィヴィアン夫人と娘に会った」

「ああ！」ゴードンは叫び声を上げ、急に立ち止まった。バーナードは彼を見たが、ゴードンは目をそむけていた。ゴードンの眼は群衆の中で誰かを捉えていた。バーナードはその眼が向いていた方を見た。そしてゴードンは続けた。「噂をすれば、だな。諺なんか言ってすまんね！ あれは問題の女性たちじゃないか？」

本当にヴィヴィアン夫人と娘が、大通りの端の二つの貸し椅子に、他のおびただしい物静かな人々に混じって座っていた。彼女たちは我々の二人の友人の方へ向いていた。そしてきちんとした服装の人々の中にバーナードが彼女たちを見つけた時、二人はゴードン・ライトの方をまっすぐ見ていた。

「彼女たちは君を見ているよ！」バーナードは言った。

「僕が逃げたがっているような言い方をするね」ゴードンは応えた。「逃げたくはないよ。むしろ彼女たちに話しかけたいんだ」

「それは簡単にできるさ」バーナードは言った。彼らは二人の女性の方へ歩いていった。

彼らが近づくと、ヴィヴィアン夫人と娘は椅子から立ち上がった。彼女たちがすばやく意見を述べ合って、ゴードンを立って迎えた方が話がしやすいだろうと決めたのは明らかだった。ゴードンは群衆の中を彼女たちの方へ進んでいったが、興奮している時はいつもそうであるように、ひどく顔を赤らめていた。そして彼は帽子を脱いで立ち、彼女たちそれぞれと握手したが、その笑みはこわばり、明らかに何も言うことがなさそうだった。バー

ナードはアンジェラの顔を見ていた。彼女はバーナードの友人に美しく微笑んでいた。ヴィヴィアン夫人は細かく気を遣っていた。

「きっとあなた方だろうと思いました」とうとうゴードンは言った。「ちょうどあなた方のお話をしていたところですよ」

「私たちじゃないとロンゲヴィルさんはおっしゃったのですか」ヴィヴィアン夫人はいたずらっぽく尋ねた。

「あの方に印象を与えた私たちは思っていましたのに！」

「パリにおられることは知っていました。まさにあなた方のお話をしていました」ゴードンは続けた。「お会いできて嬉しいですよ」

バーナードは一心に見ながらアンジェラと握手した。彼と目が合った時、彼女の目にはからかいの光があるように思えた。彼女は誰をからかっているのだろう、ゴードンをか、彼自身をか。バーナードは落着きを失い、からかわれるのを好まなかった。しかしゴードンがからかわれているとしたら一層かわいそうだと思った。

「あなたがおいになることは私たちも知っていました。ロンゲヴィルさんが教えてくださいました」ヴィヴィアン夫人は言った。「それにブランチにお会いできると楽しみにしておりました。あの可愛いブランチに！」

「可愛いブランチはすぐにお会いしに来るでしょう」ゴードンは応えた。

「すぐに、でありますように」ヴィヴィアン夫人は言った。「きっととても楽しいでしょう」夫人は哀れなゴードンに何か慰めるような同情するようなことを言いたがっている、とバーナードは見取った。かつて彼女の幸せにとって（義理の息子として）彼は欠くことのできない存在だと思うようにとゴードンを励ましたことに気が咎めて、彼の助けなしで出来上がった幸福の光景をゴードンに見せるべきだと夫人は考えている、とバーナード

は思った。「私たちはあなたのご結婚に興味津々ですわ」彼女は続けた。「ご結婚はさぞかし、さぞかし素晴らしいことだと思っております」

ゴードンはしばらく地面を見すえていた。

「それは一部あなたのおかげです」彼は答えた。「ブランチに実によくしてくださったのですから。彼女の精神を教化し作法に磨きをかけてくださったので、彼女の魅力は倍加し、僕はやすやすとその魅力の虜になりました」こうした言葉をゴードンは謹厳さを誇張して発したので、結果としてしばらくのあいだ、ほとんど気まずい沈黙が覆った。バーナードは自分の気まずさにますます苛立ってきて、大きく明るい声で言った。

「ブランチはたくさん犠牲者を作りました！ 僕も昨冬犠牲者になりました。僕たちは皆犠牲者です！」

「可愛いブランチ！」ヴィヴィアン夫人はまたつぶやいた。

アンジェラは何も言わなかった。ただそこに立っていただけで、ゴードンに話しかけようとはしなかった。それでいて、よそよそしいとか冷淡だというそぶりも見せなかった。やがて彼女はゴードンに話しかけたいという衝動を覚えたようだ。

「ブランチが私たちに会いに来る時には、あなたも一緒においでくださいね」彼女は親しく微笑んで言った。

ゴードンは彼女を見たが、何も言わなかった。

「彼女のお具合がよくないと聞いて、心配しておりました」アンジェラは続けた。

彼女の表情豊かで魅力的な顔をじっと見つめながら、ゴードンはまだ黙っていた。

「重い病気ではないです」彼はとうとうつぶやいた。

「あんなに元気で、あんなに朗らかでしたもの」アンジェラは言った。彼女は何か優しく安らぐようなことを言

いたがっているようでもあった。

ゴードンはこれには応えず、ただ彼女を見た。

「あなたはお元気でしょね、ヴィヴィアンさん」彼はとうとう言った。

「おかげさまでとても元気です」

「パリにお住まいですか」

「今のところはここにテントを張っています」

「ここはお好きですか」

「ここが他のところよりひどいとは思いませんわ」

ゴードンは彼女と話したそうだったが、何も言うことを思いつかなかった。彼女と話することは、彼女を見る口実だった。悩みをかかえた元の恋人に微笑みかける彼女がこれほど美しかった時はないと思うバーナードは、ゴードンがこの特権を引き延ばしたいと思うのは容易に想像できた。

「ここに長くお座りになっておられたのですか」とうとう、何か考えながらゴードンは尋ねた。

「半時間です。散歩しに出かけてきましたが、母が疲れてしまって。もう家に戻る時間です」アンジェラはつけ加えた。

「そうよ、娘や、私は疲れました。馬車に乗らなくてはなりません。ロングヴィルさんがご親切に一台見つけてくださればですけど」ヴィヴィアン夫人は言った。

バーナードは、大至急見つけますと言ってまわりを見たものの、友人たちの近くにとどまっていた。ゴードンは何か他のことを考えていた。「あれからまたバーデンへ行かれましたか」バーナードは彼が尋ねるのを聞いた。

しかしこの時バーナードは、空の馬車を通りをやってくるのを見た。その馬車に合図しに行かざるをえなかった。彼が馬車を連れて戻ってきた時、二人の女性には、ゴードンに付き添われて歩道の端のところまで来ていた。彼女たちは馬車に乗り込む前にゴードンと握手した。そしてヴィヴィアン夫人は言った。

「大事なあなたの奥様によろしくとお伝えくださいね！」

二人の女性には馬車に乗り、さよならと微笑んだ。小さな馬車はゆるやかにごろごろと去っていき、バーナードはゴードンとともに立ってそれを見送った。彼らは少しの間それを見ていたが、やがてゴードンは友人の方を向いた。彼は奇妙な表情を浮かべてしばらくじっとバーナードを見た。

「彼女に会うのは不思議な気がする！」やがて彼は言った。

「不快というわけでもないといいが」バーナードは微笑みながら答えた。

「すばらしく美しいね」ゴードンは続けた。

「美人だね」

「不思議なのは、今の彼女が僕にはあまりに違って見えることだ」ゴードンは続けた。「以前は彼女のことを謎めいた、理解しがたい人だと思っていた。今では非常に素朴な人に見える」

「ああ」バーナードは笑いながら言った。「それは進歩だね！」

「非常に素朴で、しかも非常に善良だ！」ゴードンは声を上げた。

首をゆっくりと振りながら、バーナードは手を友の肩に置いた。

「そんなことは考えすぎない方がいい」彼は言った。

「非常に素朴で、非常に善良で、非常に魅力的だ！」ゴードンは繰り返した。

「おいおいゴードン君！」バーナードはつぶやいた
しかしゴードンはまだ続けた。

「非常に知的で、賢く、分別がある」

「二分間話ただけでそれがすべて分かったのかい」

「そうさ、二分間話ただけで。もう彼女のことであらうべきではない！」

「君がそう言わない方がいいんだが」バーナードは言った。

「どうしてそう言うてはいけないんだ。そう言うのは僕の義務のように思える」

「いや、君の義務は他にある」バーナードは言った。「理由は二つある。一つは君が別の女性と結婚したことだ」

「そのことが何の関係がある」ゴードンは声を張り上げた。

この問いにバーナードは答えようとしなかった。彼はただ続けた。

「もう一つは、もう一つは」

しかしここで彼はためらった。

「もう一つは何だい」ゴードンは尋ねた。

「僕がヴィヴィアンさんと婚約したことだ」

バーナードはこう言って、ゴードンの肩から手をのけた。

ゴードンは目を見開いて立っていた。

「ヴィヴィアンさんと婚約しただと」

聞こえるように、はっきりと、大きな声で自分がそれを口に行っているのを聞いた今、心配という呪縛は解かれ

たように思われ、バーナードは勇敢に続けた。

「近いうちに結婚することになっている。すべては二、三週間のうちに起ったんだ。君にはとても奇妙に見えるだろう。たぶん君は気に入らないだろう。だから君に言うのをためらっていたんだ」

ゴードンの顔は青くなった。ゴードンがそんな風になるのを見るのは、バーナードには初めてだった。彼が気に入っていないのは明らかだった。彼は目を見開いたり顔をしかめたりしながら立っていた。

「おや、僕は、僕は」彼はとうとう言いはじめた。「君は彼女を嫌っていると思っていたが！」

「僕もそう思っていたさ」バーナードは言った。「しかしそれを乗り越えたんだ」

ゴードンは向きを変え、大通りの群衆の方を見た。それからまたこちらを見て言った。

「非常に驚いた」

「そして君は嬉しくない！」

ゴードンは地面をじっと見た。

「婚約おめでとう」彼はやっと言い、顔を上げた。その顔はバーナードにはこわばって不自然に見えた。

「そう言ってくれるのは大変ありがたいが、もちろん君が嬉しいはずがないよね！ 絶対君の気に入らないと思っただよ。しかし僕に何ができただろう。僕は彼女に恋した。ただ君を驚かせたくないという理由で逃げ出すことなんかできなかった。なあゴードン」バーナードはつけ加えた。「君もこれに慣れるよ」

「そうだな」ゴードンは素気なく言った。「でも僕に時間をくれなくては」

「好きなだけ時間を取ってくれよ！」

ゴードンはまたしばらく地面を見つめて立っていた。

「それなら結構だ。時間をかけるよ」彼は言った。「さよなら！」

そして彼は一人で歩き去ろうとでもいうかのように向きを変えた。

「どこへ行くんだい」バーナードは彼をとどめて尋ねた。

「分らない。ホテルかどこかだ。君が話したことに慣れるように努めよう」

「あまり努めすぎるなよ。自然に慣れるものさ」バーナードは言った。

「いずれ分るさ！」

そしてゴードンはふたたび向きを変えた。

「一人で行く方がいいのかい」

「そうだ、君のお許しが得られれば！」

「君にはもっとひどい失礼を許してほしいとお願いしてきた！」バーナードは微笑みながら言った。

「それはまだしてないな！」ゴードンは応えた。そして立ち去り、群衆に混じっていった。

バーナードはゴードンが見えなくなるまで目で追った。そして目に入った最初の空いた椅子に沈み込みながら、あの友人は彼が怖れていたとおりこの話を嫌っていたな、と考えた。

第二十六章

バーナードは長い間座って考えた。最初はひどい悔しさを覚え、最後にはひどい苦しさを覚えた。とうとう彼は怒りを感じた。ただ、彼は自分に対して怒ったわけではなかった。哀れなゴードンに、そしてゴードンの不快

感に腹を立てたのだ。彼は落ち着かなかった。そして自分の落ち着きのなさに腹を立てた。これは彼の状況の自然な一部ではないように思われた。真っ白なページに魅力的な娘との婚約を記した運命の本の中に、彼はそんなものをちらとでも見たことはなかった。ゴードンは驚くだろう、少しはショックを受け、腹も立てるかもしれない。これは彼の権利であり特権だった。バーナードはこれについては心の準備ができており、なんとか我慢しようと思っていた。しかし限度を超えるべきではない。彼が飲み込んでいいと思う臓物パイ[®]には限度があるのだ。立腹し悪意と危険に溢れて立ち去った——そうだ、あれが彼の外観だったのは確かだ——時のゴードンの様子や姿の中の何かが、バーナードの心に不吉な印象を残した。その結果しばらくして彼は怒りに逃げ込んで喜んだ。たとえばゴードンは何を期待しているというんだろう！ゴードンにショックを与えないために、バーナードがアンジェラを諦めることを望んでいるのだろうか。あるいは理想的な償いと称して婚約を解消することを。いや、それはあまりにばかっている。それにゴードン自身に妻がいる以上、正義の名においてなぜバーナードが妻を娶っていけないのか。

腹を立てることは息抜きにはなるが、必ずしも解決ではない。バーナードは、まわりで起こっているあらゆることを、一、二時間というもののまったく意識していなかった。やがて彼はその場所から離れ、落ち着きなく苛立ちながらしばらく歩きまわった。ある時には、ゴードンのホテルに戻って彼に会い説明しようかと思った。しかしその後には、自分がそんなことをするには腹を立てすぎている、ゴードンもまた怒っているのは言うまでもない、と意識した。それに何も説明することはない、とも思った。彼はアンジェラ・ヴィヴィアンと結婚しようとしていた。それはまったく単純な事実だ。説明の必要はなかった。それはあまりにすばらしく考えられない事なので、起こりそうにないともいうのだろうか。日曜日にいつもしているように、彼はヴィヴィアン夫人のどこ

ろに食事に行った。そして二人の女性の中に、彼自身の原因と同じところから発する動揺のいくつかの兆候を見たように思った。今回バーナードは、食事の席でとりわけ楽しげにすることはできなかった。自分が何を食べているか分らないかのように、彼はすばやく食べ、ほとんど話をしなかった。時折彼の目はアンジェラにしばらく注がれた。その目は、あたかも彼女をよく見て彼女についての決心を新たにしようとするかのように、奇妙で熱のこもった表情を浮かべていた。この若い女性は、彼の不可解な視線を表面的にはまったく落着いて受け止めた。しかし彼女も黙っていて、異常に不安な様子で、時々彼の凝視に應えていた。彼女はもちろんゴードンのことを考えている、とバーナードは独りごとを言った。何年も経ってから元の恋人と初めて会うのは、女性にある印象を与えるにちがいない。しかしゴードンは決して恋人であったことはない。そしてバーナードがアンジェラの真剣さに気づいたとしても、それは彼が嫉妬したからではなかった。「彼女はただゴードンを憐れんでいるんだ」彼は独りごとを言った。食事を終えるころまでには、自分もまた憐れんでいるという思いが彼に戻りはじめていた。おそらくヴィヴィアン夫人も憐れに思っているだろう。わずかに混乱し、うわの空の様子である。くやしいと思いつつも、バーナードは夫人の様子をちょっとおもしろいとも感じた。ヴィヴィアン夫人の良心は、時々その失策を思い出すのだ。ゴードン・ライトと出会ったことは、彼女の人生でもっとも模範的でないエピソードを思い出させた。いぶかしそうに母親を見ながら青ざめて憂鬱に座っている娘の耳に、夫人が金銭ずくの忠告をささやいたあの時のことである。バーナードと目が合った時、ヴィヴィアン夫人は少し顔を赤らめた。そして自分が結局は徳の高い女性であることを思い出すべく、高尚で無害なことについて——秋の気候の美しさ、日曜日に子どもと手をつないで散歩する父親たちを見る楽しみ、午前中に聴きに行ってきたプロテストタントの牧師の話に見られるような、この国の説教の特徴などを——できるだけたくさん喋った。

テーブルを立ち、小さな応接間に戻った時、夫人は娘をしばらくバーナードと二人だけにした。二人は暖炉の前に一緒に立った。バーナードはヴィヴィアン夫人がドアをそっと後ろ手で閉めるのを見ていた。しばらく相手を見ながら、とうとう彼は知らせた。

「彼はひどく怒っています！」

「ひどく怒っている、ですって」アンジェラは言った。「ライトさんのことですか」

「あの愛想の良い、道理をわきまえたゴードンです。彼は大変厳しく受けとめています」

「私のことで、とおっしゃるのですか」アンジェラは尋ねた。

「彼が怒っているのは、もちろんあなたに対してではありません。僕に対してです。簡単には許してくれないでしょう」

アンジェラはしばらく火を見ていた。

「あの方にはお気の毒とおります」とうとう彼女は言った。

「僕こそ憐れまれるべき人間だと思えますが」バーナードは言った。「それによりにもよってあなたが、彼にどんな同情をされるのか僕には分かりません」

アンジェラはふたたび火を見つめた。おもむろに目を上げて、彼女は言った。

「あの方は私にとっても好意を持っておられました」

「それならますます彼は恥じるべきです！」バーナードは声を上げた。

「そうおっしゃる意味は」娘は美しい目で見つめながら尋ねた。

「もし彼があなたを好きだったなら、どうしてあなたを諦めたんです」

「彼は私を諦めたものではありません」

「どういう意味でしょうか、お聞かせください」彼女を見つめ返しながらバーナードは尋ねた。

「私は彼を追い払いました。彼を拒絶したのです」アンジェラは言った。

「そうです。しかしあなたは考え直された。そしてお母様は、もし彼がふたたび求婚してきたら彼を受け入れる方がいい、とあなたに説かれました。彼が退散したのはその時でした。彼がイギリスから戻ってきた時に僕が彼に言ったことの結果として」

彼女は奇妙な微笑みを浮かべて、ゆっくりと首を振った。

「まあバーナード。とても乱暴な言い方をなさっているわ。彼は私にまた求婚しましたの」

「あの晩にですか」バーナードは声を上げた。

「イギリスから戻られたあの晩です。私が彼に最後に、今日までにですが、会った時です。」

「僕があなたについてひどいことを言った後にですか」混乱した我々の主人公は、重々しくしかめ面をしながら大声で言った。

「あなたのお言葉があまり効果を上げなかった、と申し上げるのは辛いですか！」

バーナードは熱心と言えるほど腕組みをして、長く聞き取りにくい満足のつぶやきを発しながら、彼女を見つめて立っていた。

「ああ、では僕はあなたを傷つけたわけではなかった、あなたから機会を奪ったわけではなかったんですね」

「まあ、あなたの側の意図は同じでしたわね！」アンジェラは声を上げた。

「それでは僕の不安や良心の呵責は無駄だったわけですね」彼は続けた。

しかし彼女は同じ口調で話し、その優しい茶目っ気は、ただ彼の安堵感にいつそうの楽しさを与えるだけだった。

「それはあなたが支払うべきわずかな償いでした」

「あなたはきっぱりと彼を退けられた、そしてそれが彼が立ち去った理由だと」まだ不可解な思いでバーナードは尋ねた。

「彼は私にもう一度『機会』——あなたが上品に使われる言葉ですが——を与えてくださり、私はそれを利用するのを断ったのです」

「ああ、そうですか」バーナードは声を上げた。「今は彼のことをかわいそうに思います！」

「私はとても優しくしました。とても敬意を払いました」アンジェラは言った。「心の底から彼にお礼を言いました。私が彼にしようとしている非道——それが非道であるなら——に対して、彼に謙虚に許しを請いました。翌朝七時にバーデンを去ってくださいなどとは絶対に言っていません。彼がそんなことをするとは思いませんでした。だから私は、私たちは立ち去らねばならないと母に言い張りました。立ち去った時、私は彼が去っていたことなど何も知りませんでした。彼はまだバーデンにいると思っていました。もう彼には会いたくありませんでした」

アンジェラはこの情報を、ある種の努力をして状況を思い出そうとしているかのように、文と文に間を取りながらゆっくりと穏やかに出した。その間バーナードは、晴れ晴れとした顔で彼女の唇に目をくぎづけにして、部屋の中を興奮して歩きまわった。

「それでは彼は僕を非難できないんだ！」彼はまた激しく言いはじめた。「もし僕が言ったことが彼にそれ以上

の影響を与えなかったとしたら、たしかに僕は彼に何も悪いことはしなかったんだ」

「あなたはあなたが言われたことを彼が信じなかったのを怒っておられる、と私は思います」アンジェラは言った。

「僕には理解できない、と白状します。彼はいかにも信じたようでした。たしかに彼は、ただちにあなたのもとへ行って究極の秘密を打ち明けようとする男の様子はしていませんでした」

「秘密の打ち明け話ではありませんでした」アンジェラは言った。「私とは関係のない話でした。それは彼とあなたの間のことでした。それは独立の話でした。彼はおおむねあなたの言われたことを信じました。あなたの言われたことは彼自身の印象と合致しました。奇妙な印象でしたが！ とはいえ彼は私が好きでもありました。彼の厄介のすべては、彼が私を好いていることから来ていました！ 彼は、あなたの言われることを自分があまりにも信じ込んで耳を傾けているのに気づきました。それを彼は男らしくなく不名誉だと思ったのです。その感覚は反動をもたらしました。そのような問題において自分が誰の影響も受けないことを証明するために、あなたと話した一時間後に彼は堂々と歩きだしたのです。つまり、私の不品行——あなた方お二人を天が救われますように！——についてのあなたの説明によって、彼の完璧な不信感が強められたにもかかわらず、彼はふたたび私に求婚したのです。しかし彼は私が拒絶するのを望んでいました！」

「ああ」バーナードは叫んだ。「臆病者め！ 彼にふさわしいのは、彼にふさわしいのは」

「私が彼を受け入れることだと」アンジェラはまだ微笑みながら尋ねた。

バーナードはこの暴露話に非常に心を動かされた。彼自身の責任に関してこれまでとは違いを生じ、彼の良心から重荷を取り去るように思われて、彼はふたたびこの上ない安堵の叫び声を上げた。

「ああ、もう何も気にしません。僕はやりたいことができるんです！ ゴードンは僕を憎むかもしれないし、僕は彼を憐れむかもしれない。しかしそれは僕のせいではありません。彼に償う必要ありません。そう、僕は自由なんです！」

「自由でないのは私だけだと思います」アンジェラは言った。「そして償いは私からしなければなりません！彼が不幸なら、私が責任を取らなくてはなりません」

「もちろん、そうです」バーナードは彼女にキスをしながら言った。

「しかしどうして彼は不幸なのですか」アンジェラは尋ねた。「私が彼を拒んだとしても、それは彼が望んだことだったのです」

「彼を喜ばすのはむずかしいのです」バーナードは応えた。「彼には彼の妻がいます」

「ブランチが彼を喜ばさないとしたら、彼は本当に気難しい人です」アンジェラは少し考えながら言った。「でも先日あなたは、あの二人は仲良くやっているとおっしゃいましたわ」

「そうです。あなたにそう言ったと思います」バーナードも少し考えて答えた。

「あなたは私の言うことを聞いておられない」

「そう、僕は他のことを考えているんです。お母様に希望を持たせておきながら、最後になってあなたはなぜ彼をあんな風に拒絶したのか、と僕は考えています」バーナードは彼女に微笑んで立っていた。

「もうお考えにならないで。あなたには分りません」娘は顔をそむけて声を上げた。

「この何年間というものに自分が悪いと思わせておいたとは、残酷ですよ」彼は続けた。「それに、あの時、あなたは彼を拒むおつもりだったのですから、僕に対してはもっと正直になってくださってもよかったのでは」

「私の誤りは自分が正直すぎたことだった、と認めておりました」

「僕はひどい間抜けでした。それにあなたは僕にもっとよく理解させてもよかったのでは」

「まあ」アンジェラは言った。「あなたは女性にたくさんお聞きになりますわ！」

「なぜあなたは、僕の思い違った言葉がゴードンに影響を与えたのですか、僕はあなたに非道なことをしたのではとか、あんなに長く僕に考えさせておいたのですか。あれは僕には現実味がありました、あの非道は。あんなに何カ月もの間僕にのしかかっていた苦しみや恥辱については、あなたにお話しました！ どうしてあなたは今日まで真実を教えてくださらなかったのですか。それに今日にしてもたまたまそうだっただけです」

この問いに対してアンジェラは少し顔を赤らめた。そして彼女は微笑みながら答えた。

「私のお返しでした」

バーナードは首を振った。

「それは良くないでしょう。本気でおっしゃっているのではないでしょうね。あなたは決して気になさらなかった。気にするにはプライドが高すぎました。僕が自分の罪のことを話した時、あなたは僕の言わんとするところをお分かりにならなかった。それゆえあなたは、僕の呵責など根拠がない、僕がゴードンに言ったことは少しも役に立たなかった、決裂はあなたから行なったことだ、とおっしゃってもよかったはずです」

しばらくの間アンジェラは何も言わなかった。とうとう彼女は、彼女の顔が時折浮かべるひどく真剣な表情で彼を見た。

「本当にお知りになりたいのなら申します。あなたの良心の呵責はある意味で愛情と結びついているように私には思われた、ということがお分かりになりませんか。愛情の一種の証明だと。あなたは誰かしらを傷つけたとお思

いになった。それが、あなたが私を愛する心と混じり合っているように見えたのです。だから私はそれをそのままにしておきました」

「ああ」バーナードは言った。「僕の呵責はまったく消えました。それでいて僕はこれまでと同じほどあなたを愛していると思います！ だからあなたは、僕に教えなかったことがどれほど間違ったことだったかお分かりでしょう」

「あなたに対する間違いについては、私は気にしていません。ライトさんのことについてあなたに申し上げることができた、というのは本当です。多分そうしていた方が彼は良い人に見えたでしょう。でも、あなたが私を見捨てたことで彼を非難されなかった以上、私が彼を弁護する必要はないように思いました」

「白状しますが」バーナードは言った。「その件についてのゴードンの様子について、僕はまったく分りません。彼は以前より良く見えますか。あるいは悪くなっていますか。先ほどあなたは実にうまく言われました。僕が聞いていないとおっしゃいましたが、僕はちゃんと聞いていました。もしあなたが彼を拒むのを彼が望んでいたとしたら、彼は現在誰と言いつ争っているのですか。そしてバーデンで別れてから何ヶ月も、彼はどうして僕に冷静でいたのでしょうか。もしそれが彼の心の状態であったのなら、彼はなぜ僕に一貫性のなさを咎めるのでしょうか」

「結局そこには、女だから理解できることがあります。男の方が理解できるか私には分りません。彼は私が拒むのを望みました。それでいて、私がそうすると、彼は怒りました。しばらくして彼の怒りは鎮まりました。そして彼は哀れなブランチと結婚しました。しかし今日私があなたを受け入れたと知るや、その怒りはふたたび燃え上がったのです。それはごく自然なことだったと思います。でもそれは深刻なものにはならないでしょう」

「何が真剣にならないの、お前」ヴィヴィアン夫人は尋ねた。夫人は応接間に戻ってきていた。どうやら夫人は、真剣という言葉がどんな方面でも不足していると聞くと、いつも恐怖を感じてしまいうらしかった。^③

「バーナード、私から母に言いましょか」アンジェラは言った。

「まあ、お前、お前たちの幸せを脅かすようなことじゃないといいけど」母は穏やかだが熱心につぶやいた。

「バーナード、これは私たちの幸せを脅かしますか」娘は微笑みながら続けた。

「これが僕たちをみじめにするのを許すべきか、ヴィヴィアン夫人に決めてもらいましょう」バーナードは言った。「ヴィヴィアンさん、あなたは決疑論者^④でいらっしゃる。これはびったりの事例です」

「かわいそうなライトさんに関することですか」年配の女性は尋ねた。

「どうして『かわいそうな』ライトさんとおっしゃるのですか」バーナードは聞いた。

「あの方がランチとでは幸せではない、と残念ながら思うからです」

「どうしてお分かりになったのですか、彼らが二人でいるところをご覧になっていないのに」

「そうね、私のことをとても空想好きと思われるかもしれませんがね」ヴィヴィアン夫人は言った。「でも彼がアンジェラを見た様子で分りました。あんなにも言いたげなお顔でしたから」

「私をととても優しくご覧になりましたわ、お母さん」アンジェラは言った。

「娘や、彼は本当にじっと見つめなされた。他の方だったら、それは不作法ですと私は言ったかもしれません。

でも彼の立場はとても変ですから。それに彼がまだお前を称賛しているのは分りました」そしてヴィヴィアン夫人はごく小さなため息をついた。

「おやおや！ 夫人は年三万ドルのことを思っている」バーナードは独りごとを言った。

「まだ私を称賛していただきたいと思っていますわ」娘は笑いながら声を上げた。「そうしてくださっても今では大した害はありません」

「彼はあなたとブランチを比べていたのです。そしてその対照に驚いたのです」

「それは私に有利にはなりえなかったでしょう。もしも問題が見られることにあるなら、ブランチは私より上手に耐えます」

「哀れなブランチ！ ヴィヴィアン夫人は優しくつぶやいた。

「彼がブランチと一緒にではとても不幸だなどと、なぜおっしゃったのですか」アンジェラはバーナードの方を向きながら不意に尋ねた。

バーナードは眉を上げて、一瞬彼女を見た。

「こんな突然にそのような質問をする人は見たことがありません！」彼は声を上げた。

「お暇なときに答えてくださればいいですわ」顔をそむけながら彼女は応えた。

「それは僕があなたを称賛していたからです」

「お暇なときはそんなことはおっしゃいませんわね」娘は言った。

ヴィヴィアン夫人は立って二人を見ていた。

「こんなにお幸せなあなたたちは、恵まれない他の人たちを思いやるべきです」

「ヴィヴィアンさん、まったくそのとおりです。この一年というものの、僕はゴードンほど思いやった人はいません」

アンジェラは向き直った。

「つまりブランチはそんなにひどいのですか」

「ご自分の目でご覧になれますよ！」

「まあ、でも」ヴィヴィアン夫人は言った。「彼女はひどくありません。ただとても軽いだけです。また彼女が近くに来てくれそうでも嬉しいわ。一緒になればできることがたくさんあると思います。アンジェラや、私たちは彼女を助けなくてはなりません。以前は助けてあげたと思います」

「彼女が軽いのも本当です、ヴィヴィアンさん」バーナードは言った。「そして彼女をもう少し重くして下されば、非常にありがたいです」

バーナードの義母になる女性は、彼をちょっと見た。

「あなたが私のことを笑っておられるのかどうかわかりません。笑っておられると思いますが。でも、それでブランチを諦めるつもりはありません。一度助けようとした人を、私が諦めることはありません。ブランチは私のもとへ戻ってくるでしょう」

ヴィヴィアン夫人がそう言うやいなや、ドアのベルの小さな鋭い音が玄関で聞こえた。バーナードは応接間のドアをしばらく立って見ていた。

「あわれなゴードンが、ひと騒ぎ起こしにやってきました！」彼は告げた。

「それがおっしゃりたいことですか。あなた方のご結婚を彼が反対したと」ヴィヴィアン夫人はおびえた様子で尋ねた。

「彼がブランチをどうしようと思っているのか、僕には分かりません」バーナードは笑いながら言った。

玄関で声がした。アンジェラは聞いていた。

「彼女があなたのもとへ戻ってくると言いましたね、お母さん」彼女は声を上げた。「さあ彼女が到着しました！」

第二十七章

それと同時にドアが開かれ、ゴードン夫人が後ろに紳士を連れて戸口に現われた。ブランチは一瞬立ち止まり、明かりのついた部屋の中を見てためらった。顔を少し赤らめ微笑んだが、この上なく美しかった。

「入ってもよろしいかしら」彼女は言った。「それにラブロック大尉をお入れしてもよろしいかしら」

もちろん二人の女性は、歓迎の意を表しながら彼女の方へ急いで近づき、部屋の中へと招じ入れた。また大尉を歓迎するために進み出た。大尉はぼつが悪く恥ずかしげであったが、威厳はあり背が高く、ヴィヴィアン夫人の低い天井にほとんど頭がつきそうだった。ブランチと友人たちは優しく抱擁を交わしたが、魅力的な訪問者はただちにいつもの流暢さでおしゃべりを始めた。ヴィヴィアン夫人とアンジェラは、彼女のお連れを丁寧に歓迎した。しかしブランチは、彼のことは気になさらないで、番犬として連れてきただけですから、と言った。

「彼の居場所は敷物です」彼女は言った。「ラブロック大尉、敷物の上に寝転びなさい」

「たしかに、こういったフランスの部屋には敷物しかありません！」ヴィヴィアン夫人の客間を見まわしながら大尉は応えた。「どの敷物のことですか」

真っ先に来てくれたのはとても親切なことでした、とヴィヴィアン夫人は言ったが、大事なヴィヴィアンさんに会うまでは枕に頭を横たえられなかったでしょう、とブランチは言い放った。

「結婚しているから私が待っているだろうとお思いですか」魅力的な目にちょっとした微笑みを鋭く浮かべて、彼女は尋ねた。「本当に、それほどは結婚していません！ 今晚ラブロック大尉以外に私をここへ連れてきてくれる人がいないほど私が結婚しているように見える、とお思いですか」

「きつとラブロック大尉はとても立派な護衛ですわね」ヴィヴィアン夫人は言った。

「まあ、彼は怖がりませんでした。ここまでの道を怖がりませんでした。あの怖ろしく野蛮なシャンゼリゼをずうっと通ってききましたのに。でも着いた時、彼は中に入るのを、ここへ上がってくるのを怖がりました。ラブロック大尉は、アメリカであんなに成功したのに、ご存じのようにとっても控え目なんです。アメリカでの成功について話してくれるでしょう。それは革命の時のイギリス軍の敗北^⑤を埋め合わせるものです。イギリス軍は革命の時敗北しましたよね。いつも彼にはそう言ってきたのですが、彼はそうではなかったと言います。『じゃあどうやって私たちは自由になるのです』と私はいつも彼に聞きます。『私たちが自由だとあなたはお認めになると思いますが』すると彼は個人的な話をしはじめて、たしかにあなたはまったく自由です、と言います。でも私が言いたいのは一般的な事実です。あなたから彼に一般的事実を教えてくださいださらないかしら。彼はあなたのおっしゃることなら信じると思います。あなたが歴史やら何やらをたくさんご存じだということを彼は知っていますから。今晚ではなくて、ご都合の良いいつかという意味ですけど。彼はここへ来なくなかったです。馬車に残って葉巻を吸いたかったです。最初に私とやってくることをあなたが好まれない、と彼は思いました。でもそんなことは気にする必要はない、私がちゃんと説明するから、と私は彼に言いました。私は彼を代理として連れてきただけだということを、用心してあなたにお知らせしたいと思います。誰の代理かですって。もちろん夫の代理です。大事なヴィヴィアンさん、もちろん私はゴードンからの何かすばらしい伝言を持ってくるべきですわね。ぜひと

もお会いしに來たいが、書かなくてはならない手紙が十九通もあって炉辺から動けそうにない、とか。良い妻は夫のために言い訳を考え出すべきだ、裂け目——世間ではそう呼んでいませんか——に身を投じるべきだ、と思います。でも残念ながら私は良い妻ではありません。ロングヴィルさん、私が良い妻だと思いいなくなりますか。かつて三ヶ月も私たちと一緒におられましたから、ご覧になる機会もありだったでしょう。私はあなたにそれを真剣に聞いてはいません。あなたは決して真実をおっしゃいませんから。私はいつも真実を言います。だから自分が良い妻でないと言いますわ。それに裂け目が大きすぎ、私は小さすぎます。ああ、ヴィヴィアンさん、私は小さすぎます。自分が小さいのは分かっております。私は生きている女性としては最小です。ゴードンは顕微鏡を使っても私がほとんど見えません。彼はアメリカにもっとも強力な顕微鏡を持っていると思います。ここでももう一つ手に入れるつもりです。それが外国へ來た理由の一つです。たぶんもっと良い物でしょう。ヴィヴィアンさん、私は真実を言っているでしょう。他にないとしても、私にはその長所があります。バーデンでそうおっしゃってくださいましたわ。少なくとも私のために一つ言うことができる、それは私が嘘をつかないことです、とおっしゃったわ。バーデンでは私にとっても優しくしてくれました」熱をこめて少し微笑みながら、女主人の手に自分の手を重ねてフランチは続けた。「私が決してそれを忘れなかったことがお分りでしょう。だから、自分の評判を維持するために、私はゴードンについて真実を語らなければなりません。彼は來ないと言っただけです。ほらね！ 理由も言わず、立派な伝言もしませんでした。彼はただ断り、どこかへ出ていきました。だから彼が手紙を書いていないことがお分りでしょう。彼がいったいどこへ行ってしまったのか分りません。たぶん劇を觀にいったのでしょう。日曜の夜に劇を見に行くのは良いことではないことは分かっています。でも慈愛は我が家からと諺にもあります。そしてゴードンの慈愛は我が家から始まりませんから、たぶんどこでも始まらないでしょ

う。もしあなたが一緒に来ないなら私は一人で行きます、と彼に言いました。すると彼は、お前は好きなようにしたらいいだろう、僕は人を訪問する気分じゃない、と言いました。私はとてもここへ来たかったです。一日中そのことを考えていました。それに夜招かれずにこんな風に訪問するのがとても好きです。それから私は、お宅がサロンを開いておられるのではないかと思います。パリではみんなサロンを開いておられませんか。私はニューヨークでサロンを開こうとしました。でもゴードンがそれはうまくいかないだろうと言ったのです。それは私たちの風習ではない、と彼は言いました。ヴィヴィアンさん、今晚のこれはサロンですか。おや、そうだとおっしゃってください。ラブロック大尉がサロンにいるところをとんでも見てみたいわ！　さいわい彼は、たまたま私たちと一緒に食事をしていました。私をここへ連れてこなければ、と私は彼に言いました。ちゃんと説明すると言ったでしょ、ラブロック大尉」彼女はつけ加えた。「私が事情をはっきりさせた、とあなたに思っていたきたいわ」大尉はこのとりとめの話のあいだ、真っ赤になっていた。彼は座って、髭を引っ張ったり姿勢を変えたりしていた。がっしりした体つきの彼は、時折かすかにきしむ音を立てる小さな金メッキの椅子に座ってその姿勢を取っていた。

「あなたが説明をしはじめるまでは、僕はいつでもあなたの言われることがよく分ります」彼は当惑しながらも素直に笑って応えた。「説明がはじまると、おやまあ、僕は分からなくなってしまう。あなたは、物事の中にたいいていの人よりずっと多くのことを見られます。そうですね、ヴィヴィアン夫人」

「ブランチにはすばらしい想像力があるのです」この魅力的な訪問者に率直に微笑みながら、アンジェラは言った。

ブランチが明瞭な思考の流れに乗って鮮やかに漂っている時には、ただ輪になって讃嘆するのが周りの人々の

習慣であり、実際のところ人々の一種の暗黙の了解であった。彼らは周りに座り、彼女を見た。おそらく時には少しあくびをするが、総じて十分に楽しみ、しばしばお互いに微笑みながら意見を交わすのだった。彼女は人々を見て、彼ら一人ひとりに順に微笑んだ。誰にも自分の番があり、このことがいつもブランチに聴衆を与えるのに役立った。彼女の話の多くは支離滅裂だったが、即席の姿勢を取る時ほど彼女が美しく見える時はなかった。いやむしろ、そのような場合に彼女が百もの姿勢を取る時ほど、と言うべきだろう。たえず動きながら、彼女はそれでいて優美であった。そして決して手真似をやめない魅力的な手と、一度にあらゆるところを見る小さな意識した輝く目——唇よりも速くおしゃべりをするように見える目——によって、彼女は彼女が吐き出すたわごとを人に忘れさせ、あるいはそのたわごとを彼女の絵のような美しさの一部にすぎないと思わせた。これはいつもの行動だった。際限のないおしゃべりの習慣があつてこそ、彼女は完璧だった。彼女は聴衆に依存し、聴衆をまとめた。面白がったり魅了されている半ダースほどの男女の組を見て、彼女は愚行を次々に行なっていた。この場合、聴衆は彼女をがっかりさせることはなかった。彼らは皆、非常に興味を抱いていたのだ。ラブロック大尉の興味は、私たちも知っているように常習的なものだった。そして私たちの他の三人の友人たちは、ブランチが密接に関わっている問題に大いに心を奪われていた。機械的に微笑みながら彼女に耳を傾けていたバーナードは、元気づけられてはいなかった。彼は、彼女が入ってくる直前にヴィヴィアン夫人が言ったことを覚えていた。そしてゴードンが世界で一番すばらしい娘とこの巨大な蝶とを比較することに半日も没頭していたと考えることは、彼には楽しくはなかった。膝の上で手を交差させ、美しい頭を少し傾げ、唇には優しいが不可解な微笑みを浮かべて、アンジェラが彼女の近くにじっと腰かけている時、その対照は鮮やかに際立った。ヴィヴィアン夫人はソファのブランチの隣に座っていた。ブランチの片方の手が他に使われていない時、夫人は時折その手を

自分の手の中に入れた。

「かわいいブランチ！」彼女は時々優しくつぶやいた。

こうしたちょっとした言葉でも、ゴードン夫人がしばしば起こることを許すよりも長い休止時間となった。彼女は百もの話題について意見を述べ続け、どこで彼女をさえぎるかはほとんど問題ではなかった。

「私たちが何をしようとしているのか、私はまったく知りません。それについて私が言うことはありません。私が決めなければならない、とゴードンは毎日言います。そういう時、私はラブロック大尉にどう思つか聞きます。なぜなら、お分りでしょう、彼はいつもいっぱい考えているからです。ラブロック大尉は、まったく心配していません、あなたが行くところはどこでも行きます、と言います。そういうわけで、私たちが大して遠くに行かないことがお分りでしょう。私はラブロック大尉が行かないところに行きたいのですが、彼はそういう手助けをしようとしません。彼が私たちの後についてこない方が見栄えがよくなる、と私は思います。ヴィヴィアンさん、見栄えがよくなると思われませんか。私たちがどこへ行くか私が気にしているとか、ラブロック大尉が私たちについてくるかどうか、とかの問題ではありません。ヴィヴィアンさん、私は何についても興味がないのです。それはとても悲しいことだと思いませんか。ゴードンはどこへでも好きなところに、サンクトペテルブルグ®でもボンベイでも行ったらいいのです」

「ボンベイよりひどいところへも行ってもいいですよ」ラブロック大尉は、思い出をいっぱい持ったインド生まれのイギリス人の権威をもって言った。

ブランチは彼を少し睨んだ。

「まあ、それではぶちこわしね！ あなたの話しぶりからすると、あなたは私たちについてくるのでしょうか。そ

う思えば思うほど、それではうまくいかないことが分ります。でも私たちはどこか南の地へ行かなければなりません。私がひどく具合が悪いからです。自分がどうしたのか私には分りませんし、他の誰にも分りません。でもそれは大したことではありません。私が健康を害しているのははっきりしています。その利点を考えると、健康であるのと健康でないのは同じようなものです。健康でないなら、少なくとも外国に来ることができます。それはゴードンの発明です。彼はいつも発明をしています。それは私がとても愚かだから、ということはお分りでしょう。彼はいつもそれを私が病人だからというせいでできます。ヴィヴィアンさん、私がしたいことは、冬をあなたと過ごしたい、ただあなたの隣でソファに座り、あなたの手を握っていたいということなのです。あなたには退屈かもしれませんが、私には本当に他のどんなことよりもいいように思えます。バーデンでのあの夏、私が結婚する前にあなたがどれほど親切だったか、私は決して忘れていません。あなたたちは私にとってすべてでした、あなたとラブロック大尉は。このすばらしい部屋を出ていかなければ、きっと私は幸せでしょう。まったく美しく整えられましたわ。家に帰ったら、自分の部屋をこんな風に見ようと思います。それにきれいな服を着ておられるわ。こういうことは決しておっしゃいませんですが、あなたとアンジェラはいつも私よりいい服を持っておられた。いつもこんなに静かに真面目にしておられるのですか。絹モスリンの話などしなくて、いつも何かすばらしい本の話をしておられるのですか。私がここに住みに来るのを許していただきましたわ。あなたが私にそう言うてくだされば、ゴードンはとても喜びますわ。彼は、私のことでこれ以上悩まなくてもよくなるでしょう。彼はカルチエ・ラタン^⑦に住みに行けて——それが彼の本心です——、古い瓶のことだけを考えることができます。招待をお願いするのは不作法だということは分かっています」プランチはいっそう優しさをきらめかせて微笑みつつ続けた。「でも健康が問題になる時には、人は生きていたいと望みますわね。ヴィヴィアンさん、私

にはそれがとても助けになるでしょう。本当にとても助けになるでしょう！」

喋りながら彼女は、女主人の方へますます体を向けた。そしてとうとう彼女は両手をヴィヴィアン夫人にあずけて、真剣でありおどけているという奇妙な表情で夫人を見ながら座っていた。ブランチが本心からの欲求を述べているのか一時的な気まぐれを言っているのか、見分けるのはむずかしかった。また、この突然のちょっとした嘆願を、真剣に受け取るべきか、多少なりとも効果のある一連の態度の中の芝居がかった所作にすぎないと扱うべきかも、判断に迷うところだった。彼女の微笑みはほとんどしかめ面になっていた。彼女は紅潮し、かわいい歯を見せていた。しかし声にはわずかに熱を帯びた震えがあった。

「大事な子」ヴィヴィアン夫人は言った。「あなたに訪問してもらえば楽しいわ。そしてあなたに何かしてあげられたら、とても嬉しいでしょう。でも、あなたはすぐに私たちに飽きてしまうでしょう。それに、正直にお伝えしなければなりません、このささやかな家庭は、まあ、ばらばらになることになっています。変化が起ることになっています」善良な女性は、微笑みながらバーナードとアンジェラをちらりと見て、続けた。彼女は躊躇していたが、それは不確かな地面を歩いているという感覚から来ているものらしかった。

ブランチは、興奮気味だが無邪気に、あまりに無邪気に目を見開いて、そこに座っていた。彼女の目はヴィヴィアン氏の視線に続いた。その視線は一瞬バーナードの視線とぶつかった。この瞬間、何らかの理由でバーナードは顔を赤らめた。

彼はすぐに立ち上がり、窓の方へ歩いていった。そして外の暗闇を見ながら立っていた。「おやおや！」彼は独りごとをつぶやいた。「彼女は僕たちが結婚することを知ってさえない。ゴードンは彼女に言うことができなかつたんだな！」そしてこの事実、ゴードンの心理状態についての証拠をはらんでいるように思われた。そ

れは状況を平易にするようには見えなかった。しばらくして、バーナードが背中を向けてそこに立っていると――彼はばつが悪く愚かだと感じた――、ブランチがちょっと驚いた声で言いはじめるのが聞こえた。

「おや、行ってしまわれるの。旅行に行かれるの。でも、それはいいわね。一緒に旅行できるわ。旅行にいかれないの。じゃあ、何をなさるおつもりなの。アメリカへ戻られるの。でも、私が外国へ来てすぐにそんなことはできませんわ。ヴィヴィアンさん、かわいそうなブランチに対してそれはいいことではないし、友達甲斐がないわ。アメリカへ戻られるわけではないの。じゃあ、私はもう分りません！ その大いなる謎は何ですか。アンジェラについてのことですか。アンジェラにはいつも謎があったわ。そう言ってもお気になさらないわね。でも私はいつもあなたが怖かった。私の夫は、ご存じのようにあなたをとて称賛していますが、しばしばあなたのことを私に説明してくれました。でも私には決して理解できませんでした。あなたは今度は何をしようとしているの。修道院へお入りになるの。まさか、ひょっとして！」

そして突然、すばやく話をやめ、ゴードン夫人は長い驚きの叫び声を上げた。バーナードは彼女が飛び上がるのを聞いた。そして他の二人の女性も席から立ち上がった。ラブロック大尉も立ち上がった。バーナードは彼が小さな金メッキの椅子をひっくり返す音を聞いた。沈黙があり、その間にブランチは驚愕と喜びを無言でわずかに表した。バーナードは向き直り、半ダースの即座の質問に応じた。

「どうして隠していらっしゃるの。なぜ顔を赤らめておられるの。あなたがそんな風になさるのを見たことがありませんわ！ どうしてそんな妙なお顔をなさるの。私に何を言わせようとされているの。アンジェラ、本当なの、そのようなことなの」最後の問いに対する答えを待たずに、ブランチはヴィヴィアン夫人に向かった。「ヴィヴィアンさん」彼女は叫んだ。「彼女は結婚したのですか」

「ブランチさん」バーナードは進み出て言った。「ゴードンが言いませんでしたか。アンジェラと僕はまだ結婚していませんが、まもなくそうなることを望んでいます。ゴードンは今朝知ったばかりです。私たち自身も知って間もないです。これには何の謎もありませんし、僕たちはあなたのご祝辞をいただきたいと思っているだけです」

「そうね、このことについてあなたの方がまったく黙っておられたと言わざるをえません！」ブランチは声を上げた。「私が婚約をした時には、あなた方みんなに手紙を書きましたわ」

「そうとも、彼女は僕にまで手紙を書いてきました！」ラブロック大尉は述べた。

アンジェラは彼女のところへ行き、キスをした。

「あなたの夫が私のことをうまく説明してくださったとは思えません！」

ゴードン夫人は両手でバーナードの婚約者を一瞬腕の長さのところにとらえ、本当に興奮し驚いている目で彼女を見た。そして彼女を長く誇張した抱擁で包んだ。

「どうして彼は私に言わなかったのかしら。どうして言わなかったのかしら」彼女はやがて言いはじめた。「言う時間はまる一日あったのに。それを知らないで私にここへ来させるなんて、ひどい人ね。これ以上ばかばかしいことがありますかしら。これ以上間の悪いことが。間が悪いとお思いじゃないですわね。お気になさいませんわね。それなら、とてもありがたいわ！でもアンジェラ、私は気に入っています。とっても、ものすごく気に入っています。すばらしいと思いますし、そんなことは私には決してなかったように思います。長い間にそうだったの。ああ、もちろんそうなっていったのね！バーデンで始まったんじゃないの、私もそこで見たんじゃないの。そのことを私が言ってもお気になさいませんわね。バーデンでは私たちみんなが混じり合っていたので、誰

が誰に氣を遣っていたか分りませんでしたわ！ でもバーナードはとても誠実でした。それはあなたに保証できます。アメリカにいた時には、彼は他の女性を見ようとしませんでした。私はそういうことはちょっと知っているんです！ 彼は我が家に三ヶ月いましたが、決して私に話しかけませんでした。バーナードさん、今その理由が分りました。でもあの時私におっしゃってくださいでもよかったのに。その理由はたしかに十分立派なものでした。私はいつも理由を知りたいのです。たとえばゴードンが私に言わなかった理由とか。それこそ私が知りたい理由です！」

ブランチはふたたび座ろうとしなかった。この魅力のある知らせにとっても興奮していて、静かにしていられない、まもなくおいとまをしなくては、と彼女は言った。その間に彼女は、友人のめいめいに半ダースのお祝いを述べた。彼女はまたヴィヴィアン夫人にキスをし、バーナードにもほとんどキスせんばかりだった。彼女は細部を尋ねた。アンジェラの「事情」についてのすべてを知りたがった。もちろん結婚のために私たちもここに留まるつもりです。でもその間は、おとなしくしてはいなくては。あまりお邪魔しすぎてはいけないわね。ラブロック大尉は、鬚を引っぱりドアのノブに視線を注ぎながら、アンジェラに二、三の断片的な、しかし善意に満ちた言葉を述べた。そしてそのノブはまもなく彼の男らしい拳によって回され、お相手の女性が引き下がれるように彼はドアを開けた。ブランチはあたふたと叫び声や抗議の声を上げながら立ち去った。ドアが彼女の後ろで閉まった時、ヴィヴィアン夫人の小さな応接間にいた我々の三人の友人は、互いに顔を見合せて立っていた。

「彼が彼女に言っていた方がもちろんよかったでしょう」バーナードは顔をしかめながら言った。「そして彼らの間にいかに意思疎通がないかを、他の人たちに知らせなかった方が。あれは彼女を傷つけました」

「かわいそうなライトさんにも理由があったのです」ヴィヴィアン夫人は言いかけた。そして意を決して説明し

た。「彼はまだアンジェラのが好きなのです。アンジェラが誰か他の人と結婚することを話すのは、彼には辛かったのです」

これはバーナードの考えでもあった。そしてヴィヴィアン夫人が言い表した時、それは心地よいものではなかった。もっとも、アンジェラ本人はそれに関心がないように見えた。実際、他のことを考えているかのように、聞いていないようだった。

「僕たちはできるだけ早く、ただ結婚しなければなりません。必要なら明日にでも」バーナードは皮肉をこめて言った。「それが僕たちが皆のためにできる最善のことです。ひとたびアンジェラが結婚すれば、ゴードンは彼女のことを考えるのをやめるでしょう。自分の想像力が既婚女性にまわりつくことを、彼は許さないでしょう。それは確かです。彼はそんな類のことを認めません。彼は他の人々に対してと同じような法則を自分にあてはめます」

「それは大したことではありません」アンジェラは素っ気なく言った。

「娘や、大したことじゃないってどういう意味なの」

「今では彼がかわいそうだと思うなくてもいいのです」

「今では、ですって。一体何が起こったんです。私はこれまでよりいっそうかわいそうだと思いますよ。彼について哀れなブランチが怖ろしい口調で言うのを聞きましたから」

娘はしばらく黙っていた。それから軽く首を振った。

「彼女の口調、彼女の口調ですって。お母さま、お分りになりませんか。彼女は彼を一心に愛しているのよ！」

第二十八章

バーナードは、この見方が極めて独創的であり、恋人のすばらしい知性にふさわしいと思った。彼はこの見方を熱烈に歓迎し、その後の十二時間それについて考えた。考えれば考えるほど、それは彼には適切だと思われた。翌日彼はヴィヴィアン夫人のもとを訪れたが、その目的はほとんど、あなたは絶対正しいとアンジェラに言うことだった。彼は旧友である小柄な小間使いによって中に招かれたが、彼女がかなり前から彼を信賴していたのははっきりしていた。紳士が声を張り上げ強調して話しているのが客間から聞こえてきた時、彼は控えの間で一瞬立ち止まり、訝しげな目で彼女を見た。

「そうです」ヴィヴィアン夫人の小間使いは言った。「旦那様に正直に申し上げますが、別の紳士がそこにおられます。それに、その何が問題でしょうか。旦那様はご自分でご覧になりますでしょう！」

「彼は長いことここにいますか」バーナードは尋ねた。

「十五分です。その紳士にはたぶん長くは思えないでしょう！」

「彼はお嬢様だけといえるのですか」

「お嬢様とだけにしてくれ、と頼まれました。私が彼を客間にお連れしました。お嬢様は、しばらく奥様と話された後で、彼を迎えることに同意されました。先ほど申しましたように、三時ごろからお二人だけでおられます。奥様はご自分の部屋におられます。旦那様のお立場なら」この物の分った女性はつけ加えた。「客間に入られてもきつとかまいません」

バーナードもこの意見にまったく賛成だった。そしてその一瞬後、彼は小さな応接間の敷居をまたぎ、ドアを

後ろ手に閉めた。

アンジェラはソファに腰掛けて、膝の上で両手を握りしめてもたれていた。視線はゴードン・ライトにじっと注がれていたが、彼の方は、彼女に決然たるスピーチをしてきたかのように、彼女の真ん前に立っていた。彼女の顔は嘆きの、ほとんど恐怖の表情を帯びていた。彼女はそのまま座っていたが、目はバーナードに無言の歓迎を示した。ゴードンは向きを変え、彼を頭から足までゆっくりと見た。バーナードは、昨日シャンゼリゼでこの友人が自分に加えた最後の一瞥をすばやく思い出した。また彼は、これが冷たい恐怖の表情の繰り返しではないことを、満足して見た。しかしながら、その恐怖がましなものになったかどうかは疑問だった。哀れなゴードンはひどく悲しげであり、痛ましいほど傷つけられた様子だった。鋭い怒りは彼の顔から消えていた。しかし大いなる非難が、重く無力で訴えるような非難がそこにあった。ゴードンが暴力や恐怖の場面を演じたのではないことが、バーナードには分った。とはいえこれから起こることが見て取れた時、彼はむしろ暴力の方がましとさえ思った。ゴードンは彼に手を差し出さなかった。そしてバーナードが何か言う前に、アンジェラに話していたことの続きを言おうとでもするかのように、ゴードンはふたたび話し始めた。

「君は僕にひどいことをした。僕に残酷なことをした！ 僕はそれをヴィヴィアンさんに語っていた。そのために来たんだ。本当には彼女に言えない。細部を言うことはできない。あまりに辛いからね！ だが君には僕の言う意味が分るだろう！ 僕にはもう我慢できない。ここから去ろうかと思った。だがそれはできなかった。自分が感じていることを言いに来なければならぬ。もう耐えられないんだ」

いつもは感情を表に出さず、自分に注意を引きつけることを好まない男が、傷つけられたという激しい感情をこのように爆発させる様子には、それ自体で痛ましくまたおどましいものがあつた。一瞬バーナードは狼狽した。

結局自分は二枚舌の怪物だったのではないか、と彼は自問した。彼は法律用語で言う、と私が信じている、いわゆる副次的な問題に逃げ込んだという弱みを気に病んだ。

「アンジェラの前で全部を言うなよ！」彼は一種の人工的なエネルギーをこめて声を上げた。「彼女にまったく罪はないことや、これが彼女に苦痛を与えるだけだということを君は分かっているだろう。これは僕たちの間だけの問題だ」

アンジェラは座って二人の男たちを見上げた。「私は聞きたいわ」彼女は言った。

「君の趣味は変わっているね！」バーナードははっきり言った。

「僕らだけの問題だということは分かっている」ゴードンは声を上げた。「そしてヴィヴィアンさんに罪はないことも。彼女はただ美しすぎ、賢すぎ、善良すぎるだけだ！ 罪があるのは君と僕さ、ひどい罪があるのは！僕はそれを認めるが、君は認めないな。こんなことを君に言うようになるまで生きるとは思わなかった。だが、君が実際に君がやったことまでするようになるとは、夢にも思わなかった！ 自分たちは世界で一番の友人だと信じていた——少なくとも僕は信じていた——二人の男の間で、このような争いが起こるとはひどいことだ、とてもひどいことだ。なぜならこれは争いであり、大きな溝であり、それを埋めることはできないからだ。こう言わねばならない。言うしかないんだ。僕がたやすく自分の意見を言う人間じゃないことは知っているだろう。だからこんな風に僕が言い出した場合は、僕の思うところが分るだろう。これがヴィヴィアンさんには苦痛であることは分かっている。だから彼女には許しを乞う。彼女には許さなければならぬことがたくさんあるから、これも許してくれるだろう。僕にはそれを受け入れるふりはできない。座ってそれが過ぎるのを許すことはできない。そもそもそれは僕の感情だけではない。それは権利であり正義なのだ。君には彼女と結婚する権利はない、

と僕は彼女に言わねばならない。そして僕の話聞いてくれるように、君を去らせるように、彼女にお願いしなければならぬ」

「おいおいゴードン、頭がおかしくなったのか」少なくとも今の場合は十分に現実味のある力を込めて、バーナーは尋ねた。

「僕がおかしいというもありえるな。失望と、自分が失ったものについての苦しみで、僕は頭がおかしくなった。自分が発見したものについての惨めさも加えてくれ！」

「まあ、ライトさん、そんなことをおっしゃらないで」アンジェラは頼んだ。

彼はしばらく彼女を見て立っていたが、彼女の言葉に注意していなかった。「また僕の言うことを聞いてくれますか。僕があなたにした間違いを許してくれますか。僕の愚かさ、愚鈍さ、つまらなさを許してくれますか。過去を消し去って、僕にまた始めさせてくれますか。僕は今のあなたを、あの窓の光と同じほどはっきりと見えます。僕にもう一度チャンスを与えませんか」

アンジェラは目をそむけ、両手で顔をおおった。「あなたは本当に私を苦しめます！」彼女はつぶやいた。「君は言いすぎているよ」バーナーは言った。「君のとてもない申し出によって、君の妻はどんな立場に追いやられるのだ」

ゴードンは、その懇願の視線をいささかも譲歩することなく旧友に向けた。しかししばらく彼はためらっていた。「僕に妻の話をしないでくれ。僕には妻はいないんだ」

「ああ、かわいそうな子！」ソファから飛び上がりながらアンジェラは言った。

「僕は完璧に真剣です」ふたたび彼女に向いながらゴードンは続けた。「そうです。結局のところ僕は頭がおか

しくない。あまりにはつきり見えるだけです。どうあ・る・べ・き・か・見・え・る・の・で・す。それが見える時、その人は頭がおかしいと言われるのです。バーナードには権利がありません。彼は諦めなければなりません。もしあなたが本当に彼を好きなら、彼を助けるべきです。彼は非常に誤った立場にいます。彼がそんな立場にいるところを見たくないでしょう。僕があなたに説明することはできません。たとえそれが自分のためになるとしても。でもバーナードがあなたに申し上げたにちがいありません。彼があなたに言わなかったということはありえないでしょう」

「ゴードン、僕はアンジェラにすべてを言った」バーナードは言った。

「あなたは私にひどいことをしたとおっしゃいますが、私にはその意味が分りません」娘は声を上げた。

「彼があなたに申し上げていればですが、それでは僕が言わねばなりません！彼の言うことを聞いて、彼の言うことを信じて」

「だが君は僕の言うことを信じなかった」バーナードは叫んだ。「なぜなら君はただちにヴィヴィアンさんに求婚したじゃないか！」

「それでもやはり僕は君の言うことを信じたさ！僕がいつ君の言うことを信じなかったんだ」

「私がライトさんから聞いた最後の言葉は、この上なく優しい言葉でした」アンジェラは言った。

彼女は実に真剣で優しく上品に話したので、ゴードンはまた心の底まで動かされたようだった。

「ああ、僕にもう一度チャンスをください！」彼はうめいた。

哀れな娘は自分の口調をどうすることもできなかった。彼女は同じ口調で続けた。

「私のことをそんなに良く思ってくださいさるなら、分別を持つように努めてください」

ゆっくりと首を振りながら、ゴードンは彼女を見た。

「分別を持つ、分別を持つですって。そうでしょう、あなたにはそう言う権利があります。分別にあふれておられるから。しかし僕もそうです。僕がお願いしているのは分別の限界内のことなのです」

「君の幸福が失われたとしても」バーナードは言った。「僕はただ議論のために言っているんだが、それは僕から僕の幸福を奪うのを君が望む理由なのだろうか」

「君が取り上げたのは、君の幸福ではなくて僕の幸福だ！ 君は僕に油断させておいて、それを取ったんだ！ 君の幸福はどこかよにあるさ。そして君は自由にそれを手にすることができる！」

「ああ」ゴードンを長い間見つめ、顔をそむけながらバーナードはつぶやいた。「僕がまだ君を最良の友人と思うとしているのは、君には幸いだ！」

ゴードンはますます熱を帯びてアンジェラに言い続けた。

「彼は僕に油断させました。僕には他の言い方はできません。彼に大きなチャンスを与えたことは分かっています。彼を励まし、せき立て、誘いました。しかし一度話した以上、彼はその意見に固執すべきでした。彼は僕の意見と彼用の意見という二つの意見を持つべきではありませんでした。彼は僕を油断させました。あの最後の時僕がまたあなたの所へ行ったのは、僕がまだ彼に抵抗していたからです。しかし僕はやはりあなたを怖れていて、心の中では彼の言うことを信じていました。本当に僕はいつも彼を信じていました。あれは僕に対する大きな影響でした。彼はもっとも賢くもっとも知的で、もっとも才気のある男です。今でも僕は、これまでといささかも変わらずそう思っています」バーナードの方へ向き直りながら彼は続けた。「それどころか僕は一層そう思う。君がそれを信じる女性を見つけたのも、むべなるかなだよ。でも僕を騙す以外に君は何をやったんだ。僕を安心させたのはまさに君の知性についての僕の信仰さ。ヴィヴィアンさんが二度目に僕を拒絶し、僕はバーデン

を去ったが、僕は最初は一種の安堵を感じた。しかしもっとまじな感覚が戻ってきた。その感覚は、今日のこの感覚に比べれば弱い、僕を不安にさせ後悔で一杯にするほど強烈だ。後悔を鎮めるために、僕は君が言ったことを考え続け、黙っていた。君の言葉は僕にはそれほど重みがあつたんだ！」

「さらに何度君は拒絶されたかつたんだい。僕に自由を与えるために何度かの拒絶が必要だつたんだ」バーナードは尋ねた。

「そんな疑問は何の意味もない。僕がヴィヴィアンさんにもう一度求婚したことを君は知らなかつたんだからな」
「そうさ。君が僕に話させたことすべてを考えると、君は僕にほとんど何も話してくれなかつたね」

「僕はまったく自分の思い通りにやる、と前もって言っておいたよな」

「君は僕にも同じ自由を認めるべきだつたね！」

「自由だって！」ゴードンは叫んだ。「君は世界中を歩き回る自由を持っていなかつたか。彼は他の女性を千人も発見できなかったか」

「そう思われるのは私のためではありません」アンジェラは少し笑いながら言った。

ゴードンは彼女を一瞬見た。

「ああ、あなたははじめから彼が好きだつたんだ！」彼は声を上げた。

「私はあなたにお会いする前に彼に会っています」娘は言った。

バーナードは感嘆の声を抑えた。この言葉からは一種の過去の告白が輝き出た。その告白は、彼女が直接彼に決して言わなかつたことを語っていた。彼女は言うやいなや顔を赤らめた。そしてバーナードはここに美を見た。そしてその明るさが、彼女がゴードンに今語った事実の間の悪い面に対して彼を盲目にした。ゴードンはこの事

実を見つめながら立っていた。やがて、とうとう彼はそれをおおむね理解した。

「ああ、それでは、これは君たちで仕組んだことだったんだな！」彼は大声で言った。

バーナードとアンジェラは憐憫の視線を交わした。

「僕がバーデンへ来る前に、僕たちは五分間会って、言葉を二、三交わした。イタリアのシエナでのことだ。それは君に言っていないただの偶然だった」バーナードは説明した。

「それについては何も言われないことを望みました」アンジェラは言った。

「ああ、あなたは彼を愛したのです！」ゴードンは声を上げた。

アンジェラは顔をそむけた。彼女は窓のところへ行った。バーナードは彼女を目で三秒追った。それから続けた。

「そうだったとしても、僕にはそう思う理由はなかった。君は僕が君を欺いたと非難したが、僕は自分を欺いたにすぎない。僕が君を油断させたと君は言うが、君が僕を用心させたと君はむしろ言うべきだ。そのおかげで、僕はもっとも分別のないもっとも粗野な妄想に陥った。妄想は消えた。それはよりよいものの胚芽を孕んでいた。僕は自分の誤りが分った。そしてそれをひどく悔いた。そして君が結婚した日、僕は自由だと思った」

「ああ、そうさ、君がそれを待っていたことは疑いない！」ゴードンは叫んだ。「僕の結婚がみじめな失敗だということを知れば、君は興味を持つかもしれないな」

「それを聞いて残念だ。しかし僕にはどうしようもない」

「君は自分の目を見た。君はすべてを知っているし、君に言う必要はない」

「ねえライトさん」アンジェラは振り返って、懇願しながら言った。「お願いですから、そんなことをおっしゃ

らないで！」

「どうして言っただけいけないのです。僕はこれを言うためにわざわざここへ来たのです。僕はある意図を持って、計画を持ってここへ来ました。ランチがどういう人間かご存じでしょう。僕への思いやりからご存じでないというふりをされる必要はありません。彼女が僕のためにどれほど大切に貴重な妻になるにちがいないか、どれほど献身的でどれほど思いやりがあり、一日のあらゆる時間にどれほどの家庭の祝福になるにちがいないか、あなたはご存じです。バーナードが僕たちのことはすべてあなたにお伝えできます。彼は我が家という聖域の中で僕たちを見ましたから」ゴードンは皮肉っぽく笑い、自分の計画を同じように奇妙で真剣な様子で説明しつつ、続けた。「彼女は僕を軽蔑し、僕を嫌っている。僕のことなんか手袋のボタンほどにも思っていない。つまり百分の一しか思っていない、という意味だが。僕にふさわしい扱いだ、僕の自業自得だ、とあなたはおっしゃるかもしれない。彼女が愚かだから僕は彼女と結婚したのです。僕は愚かな妻がほしかったんです。あなたは賢すぎる、と僕は思いました。そうです、それがあなたについての僕の考えでした！ランチは僕がなぜ彼女を選んだか知っていて、必要とされている条項を満たそうとしました。神よ彼女を許したまえ！彼女はたしかに約束を守りました。しかしそれがどのように彼女に僕を好きにならせたにちがいないか、ご想像できるでしょう。僕がなぜ彼女を選んだのかを彼女は知ることですから！それでもやはり彼女は僕を失望させました。彼女には心があると僕は思っていました。しかしそれは間違いでした。でもそれは構わないです。僕たちの間ではすべてが終わりましたから」

「すべてが終わったとはどういう意味だい」バーナードは尋ねた。

「二、三週間のうちにすべてが終わるだろう。そうしたら僕はヴィヴィアンさんに真剣に話ができる」

「ああ！これが真剣でないと聞いて、僕は嬉しいよ」バーナードは言った。

「ヴィヴィアンさん、二、三週間待ってください」ゴードンは続けた。「その時僕にもう一度チャンスをご覧ください。その時それは完璧に正しいものになるでしょう。僕は自由になります」

「あなたはまるで、あなたの妻を終わらせるように話されます！」

「彼女は急いで自分自身を終わらせようとしている。彼女は僕から去ろうとしている」

「哀れな、不幸な人。あなたはご自分のおっしゃっていることが分かっていますか」アンジェラはつぶやいた。

「完璧に。僕はそれを言い到此へ来たのです。彼女は僕から去るつもりですし、僕も彼女にあらゆる便宜を提供するつもりです。彼女はぜひとも愛人を作りたいと思っており、すばらしい候補が彼女を待っています。バーナードは僕が誰のことを言っているか知っています。あなたがご存じかどうかは分りません。彼女は結婚後三ヶ月で愛人を持つとうとしました。これまで待っていた彼女は、本当にとても立派です。しかしもう一、二週間以上彼女が待てるとは思いません。彼女は南の氣候を勧められています。今から十日のうちに、きっと彼らは地中海の海岸へ一緒に出かけるだろうと思います。ご存じのように地中海の海岸はすばらしく、きっと彼女の健康にとっても良いでしょう。彼らがパリを発ったらすぐ、あなたにお知らせします。その時にはもちろんあなたは、僕が事実上自由であるとお認めになるでしょう」

「あなたのおっしゃる意味が分りません」

「あなたはご存じだと思いますが」ゴードンは言った。「我々は結婚が法的に解消できる国の国民であるという利点を持っています」

アンジェラは目をみはった。そして穏やかに言った。

「離婚のことをおっしゃっているの」

「世間ではそう呼んでいると思います」濃く曇った青い目で彼女を見返しながら、ゴードンは答えた。「弁護士がやってくれます。もし彼女がラブロックと去ったら、僕がそれを整えてやることほど簡単なものはないでしょう」

アンジェラは目をみはった、と私は言ったが、バーナードも目をみはっていた。そしてバーナードは顔をそむけ、抑えきれずとてつもない声で笑った。

ゴードンは一瞬彼を見た。それから、声を深く震わせながらアンジェラに言った。

「彼は僕の親友でした」

「今のこの瞬間ほど君を大事に思ったことはない！」依然として微笑みながら、バーナードは断言した。

ゴードンはまた陰鬱な目で娘をじっと見た。

「もう僕の言うことがお分かりですか」

アンジェラはしばらく彼を見返していた。

「ええ」彼女はとうとうつぶやいた。

「ではお待ちになって、僕にもう一度チャンスをご覧くださいますか」

「ええ」彼女は同じ口調で言った。

バーナードはすぐさま叫んだが、アンジェラは一瞥して彼を制した。ゴードンは彼らを一人づつ見た。

「信用してもいいですか」ゴードンは尋ねた。

「あなたを幸せにしてあげましょう」アンジェラは言った。

一体彼女はどのような意味で言っているのだろう、とバーナードは思った。しかし彼はこうつけ加えてもいいだろうと思った。

「僕は彼女の選択に従う」

ゴードンは本当に微笑みはじめた。

「長くはかからないだろうと思います。二、三週間でしょう」

アンジェラはこれには答えなかった。彼女は床をじっと見た。

「できるだけ頻繁にランチに会うつもりです」彼女はまもなく言った。

「ぜひとも！ 彼女にお会いになればなるほど、あなたは僕のことを理解できるでしょう」

「今でも私はあなたをととてもよく理解しています。でもあなたは私をととても強く揺さぶられました。だから私を一人にしてください。あなたにもお会いしましょう、しばしば」

ゴードンは帽子と杖を手を取った。彼はバーナードが同じようにしなかったのを見た。

「それでバーナードをどうされますか」彼は声を上げた。

「彼にはバリを去るようをお願いするつもりです」アンジェラは言った。

「君は行くのかい」

「僕はアンジェラが要求することをするよ」バーナードは言った。

「彼女が要求することを君は聞いただろう。今去るべきは君なんだ」

「ああ、少なくとも僕がお別れを言うのを許してくれなくては！」バーナードは叫んだ。

ゴードンはドアのところに行った。そしてドアを開け、しばらく立っていた。ドアを押さえ、アンジェラとバーナードを見ていた。

そして「ブランチはすぐに来ると思います！」と彼はアンジェラに言い、足早に出て行った。

アパートの外のドアが彼の後ろで閉まる音が聞こえるまで、二人は黙って立っていた。

「さあ、どうか説明してください！」腕を組んでバーナードは言った。

アンジェラはしばらく答えなかった。そして彼に微笑みかけた。その笑みは調和したものではなかったが、彼女の言葉がまもなくその説明の手助けとなった。

「彼は妻をとて愛しています！」

第二十九章

この言葉は非常に効果的だった。しかしこの言葉は最初、彼女の観察力を示すというより彼女の皮肉を言う能力を示すように見えただろう。バーナードにはこのような観点からそれは表わされた。しかし彼女が少しずつテキストを広げるにつれて、彼はそれを良いように考えはじめ、とうとうそれを聡明さの勝利を示すものとして、他の発見と同じレベルに置こうと考えた。他の発見とは彼女が昨晚したものであり、それに関する彼の今日の特別な用事は、彼女に新たにお祝いを述べるものであった。それは彼の賢い相手に満足をもたらしたようだが、彼にはもたらさなかった。なぜなら、彼は十分妥当に観察したのだが、ゴードンはまったく頭がおかしいのであり、こういう場合に彼の心の秘密など問題ではないからだった。

「彼の心の秘密と頭の状態は同一のものです」アンジェラは言った。「妻とともに落ち込んだ惨めなほど間違った立場によって、彼は逆さまになっているのです。彼女は彼をひどく扱っていましたが、彼も彼女の扱いを間違えてきました。あの二人はお互い愛し合っていますが、二人ともそれをただ隠しているだけです。彼は哀れな私になどまったく恋していません。三年前もそうでしたし、今日でもそうです。彼は自分が恋していると思っています。それは悲しみや恨みをいっぱい抱えているからであり、私たちの婚約の知らせが衝撃を与えたからです。でもそれは口実、すなわちランチと疎遠になったという感覚のもとで彼の心に蓄積されてきた悲しみと苦痛を吐き出す機会にすぎません。彼はプライドがありすぎて、自分の感情をその原因のせいに、また自分自身のせいにすることができないのです。でも彼は声を張り上げ自分は傷ついたと言いたかったし、不正に対して正義を要求しなかったのです。そしてあなたと私の間柄を明らかにしたことは——もちろんそれは彼には不条理と映っています。それについて私たちは寛大に斟酌しなければなりません——、突然の機会として彼に訪れました。でも、だめ」顔にたっぷりと赤みを浮かべながら、娘は、どうやら非常に魅力的だと思っているらしい自分の論理の流れを、さらに辿り続けた。「あなたが言おうとされていることは分りますが、私はそれを否定します。私は空想にふけったり詭弁を弄したり不合理ではありません。そして私は自分が何をしているのか完璧に知っています。男の方はまったく愚かです。真の識別力を持っているのは女性だけです。私を一人にしておいてください。私がちゃんとやりますから。ランチは愚かです。そう、とても愚かです。でも彼女は夫が非難するほどひどくはありません。彼はひどい言葉で彼女を非難しましたが、きつといつか後悔するでしょう。彼女は賢明にも心の底では彼のことをとても愛しています。そして彼女の小さな心は賢明にも、彼が彼女を愛していないように思えるという怒りと恥辱でいっぱいと感じています。彼が彼女をもう少し真剣に考えていたら——彼女が愚かだから彼が

結婚した、というのはまったく残念です！——、彼女は嬉しいと思うでしょう。そしてそれにふさわしくなろうとするでしょう。だめ、だめ！ 本当は、彼女はラブロック大尉なんか全然好きではないんです。彼女が好きでないことは、私が請け合います。女には分ります。おそらく彼女は危険な状態にあります。そして夫に関する彼女の現在の状態が続くなら、彼女は彼が言ったような怖ろしいことをするかもしれません。でも彼女は意地悪からするのであって、大尉への愛情からするものではありません。大尉などただちに追い払うべきです。彼女は夫を苦しめ自分のところに戻らせるために、大尉を手元に置いていただけです。彼女は明日にでも彼を永遠に捨てるでしょう」アンジェラは一瞬言葉を止め、考えつつ、目を輝かせて言った。「そして彼女にはそうさせます！」

バーナードは信じられないといった表情をした。

「どうやってそんなことをされるのです、ソロモンさん^⑤」

「お戻りになった時にお見せします」

「僕はいつ戻ってくるのです。僕はどこへ行くのですか」

「私たちの哀れな友人に私が約束したように、あなたは二週間バ리를離れます」

バーナードは苛立ちの笑い声を上げた。

「お嬢さん、ばかっていますよ！ あなたがそんな約束をされたのは、彼がそれをお願いしたのと同じように子供じみていました」

「子供を相手にする時は、人は子供じみなければなりません。あなたがこのように私に言ってこられたこの忌まわしい愛の情熱の効果をご覧なさい。その作用によって、私たちの知り合いの中でもっとも分別のあるゴードン・ライトは、幼児のレベルにまで下がりました！ あなたがお発ちになりさえすれば、私が彼をなんとかします」

「僕をかならず何とかしてください！ 僕はどこへ行ったらいいのですか」

「どこへでも好きなところへ。毎日あなたに手紙を差し上げますわ」

「それは誘因になります」バーナードは言った。「僕があなたから一通もいただいていないのはご存じでしょう」

「私はこの上なく素晴らしい手紙を書きますわ！」アンジェラは声を上げた。そして彼女は、その晩ロンドンに発つことを彼に約束させた。

彼女がそうにさせたかどうかその時、ヴィヴィアン夫人が姿を現した。この善良な婦人は、バーナードの意図を知らされて少なからず驚いた。

「ライトさんの願いを聞くために、娘を諦められるおつもりじゃないでしょうね」彼女は述べた。

「誓って言いますが、僕はまるで自分がそうするかのような気分です！」バーナードは言った。

「お母さん、私から説明いたしますわ」アンジェラは言った。「とてもおもしろいことです。ライトさんはとてもひどい騒ぎを起こされました。彼とランチの関係は怖ろしいものです」

ヴィヴィアン夫人は目を大きく開けた。

「あなたはまるで好きであるかのように話しているわ！」

「彼女はそれが好きなんです。ゴードンにそうおっしゃいました」バーナードは言った。「彼女が何をしようとされているのか僕には分りません！ ゴードンは頭がおかしくなりました。彼は妻を片付けたいと思っています」

「彼女を片付けるですって」

「歴史家の言い方で言えば、彼女と縁を切りたいと！」

「可愛いランチと縁を切るですって！」その計画の不適切さに驚いたように、ヴィヴィアン夫人はつぶやいた。

「彼らを一緒にさせておこうと思います」アンジェラは堅い決意で言った。

母親は感嘆して彼女を見た。

「娘や、私も手助けします」

二人の女性が、企てかけた仕事に対して実に謎めいた能力を持っている風であったので、バーナードには一時的な亡命地へと退く以外にしようがなかった。それゆえ彼はロンドンへ出かけた。彼はそこに社会資源を持っていたので、それを活用すればたぶん亡命生活も耐えられるだろうと思った。しかしそこに着いてみると、彼はこういった社会資源をほとんど使う気になれず、記憶と期待の楽しみ以外の楽しみを味わうことはなかった。ヴィアン夫人の馴染み深い天空の客間にいない、という思いで辛かった。あの客間は、当座は、地上で——地上で、と呼んでもいいとしたらだが——もっとも神聖な場所だと彼に思われた。そして彼は、その鮮やかな色合いでロンドンの街角を飾っている鷹揚な郵便受けに、それらにこれまでに投じられたもっとも分厚い、それも尋常でない数の手紙を託した。彼は一人で長い散歩をした。その間ずっとアンジェラのことを考えていたが、彼女には救いの天使^⑧という特性がもっとも似合っている、と思った。彼に毎日手紙を書くという約束を彼女は守った。そして彼女は非常に独創的なペンを振るう——少なくともバーナードはそう思った。彼は手紙にはうるさかった——天使だった。もちろん彼女の話題は一つだけ、すなわちゴードンに関する操作の成功だけだった。「母はプランチを相手にしています」彼女は書いた。「そして私はW氏に専心しています。本当にとても面白いわ」彼女はバーナードにすべてを細部にわたって語った。彼も面白いと思った。実際これは疑いなく興味深かった。彼の愛する女性が軽やかで繊細な手で大きな社会的亀裂を癒そうとしている魅力的な姿は、彼の旧友の取り乱した、ゆがんだ、ほとんど滑稽な姿と、彼の注意をほとんど二分したことは告白しておかなければならない。

アンジェラは、ゴードンが最初の訪問の翌日彼女に会いに戻ってきたこと、バーナードが去ったと知って非常に困惑した様子だったこと、を書いてきた。「もちろんそれはあなたがそうするように言われたからです」彼は言いました。「彼がそうするのが正しいと思ったからではありません」「私は彼に」アンジェラは手紙の中で書いていた。「そうするように言いました。でも少しばかりあなたのおかげだとも認めなければなりません。でも私はここを強調することはできませんでした。間違った雰囲気を作ったり、彼が喜んで嫉妬と名づけられると思われる感情を刺激することを怖れたのです。あなたがどこへ行ってしまったかと彼は尋ねました。そして私が言うと、『ああ、あいつは僕をどんなに憎んでいるだろう！』彼は声を上げました。『そこそあなたがまったく間違っておられるところです！』私は答えました。『彼はあなたに良かれと思っています。それは私もです』彼はそんなことは絶対信じられないという顔をしました。でも、実際、いつも彼は何も信じないという様子です。彼はとても動揺し、うろたえています。彼は半時間とどまり、訪問の目的を果たしました。一生懸命私を『喜ばせよう』としたのです！ かわいいそうな方、女性を喜ばせるという魅力ある立場におられるのです。でもたとえ私を喜ばされなくても、彼はますます私の興味をかきたてます。私はあえてあなたにそれをお伝えします。それは非常に厄介なことになる、とあなたならおっしゃったかもしれません。でも、妙なことに、私にはとてもたやすかったです。おそらくその理由は、私が非常に興味を感じたからでしょう。かわいいそうなあなたの方にとっては、おそらくとても厄介だったでしょう。なぜなら、私は保証できますが、特権が享受できたというのに、半時間後に彼は少しも前より幸福でなかったからです。彼はあなたについてもうそれ以上言いませんでした。そして私たちはパリやニューヨークやバーデンやローマのことを話しました。その状況をご想像ください！ 私はそれに対して何の抵抗もしないでしょう。私はただ、こういう話題で私と話しても彼は少しも居心地よくならないし、治療のた

めにはどこか他を探さなければならぬことを、彼に分かってもらおうと思います。私はブランチについては一言も言いませんでした」

しかし彼女は次にブランチについて語った。「今日の午後、彼はまた来ました」彼女は一通目の手紙で書いた。「昨日とまったく同じ顔をしていました。つまりとても不幸な顔です。もし私が賢すぎて自分についての彼の説明を信じられないというのであれば、ブランチが逃げ出さないという兆候を見せているので彼は不幸だと思うでしょう。彼女は長い間私たちと一緒にいました——彼女は何が起こっているのか知りません——、そして彼女がいつもよりお喋りをしないとは、正直なところ言えません。でも彼女は何軒かのお店にとっても興味を持っています、買い占めようとしています。また特に仕立て屋に行きたいとも思っています。ママは彼女に、あなたが不在なことを考えて、我が家に住みくるように提案しました。彼女もその考えを怖がっていないようです。今日彼女の夫に、私たちが彼女に提案したことで、旦那様も反対なさらないと思いますが、という希望を伝えました。『まったく反対しません。だが彼女は来ないでしょう』『その逆で、彼女は来ると言っています』『最後の最後まで彼女はそのふりをするでしょう。それから約束を取り消す口実を見つけるでしょう』『まったく、あなたは彼女のことをとても悪く考えておられます』『私は言いました。『彼女は僕を憎んでいます』『不思議そうに私を見ながら彼は答えました。『あなたは誰についてもそうおっしゃいます』『私は言いました。『きのうはバーナードについてそうおっしゃいました』『ああ、彼についてはもっと理由があるでしょう！』彼は叫びました。『私はバーナードのことをお答えしようとは思いません』『私は続けました。『でもブランチについてはお答えするつもりです。彼女があなたを憎んでいるというお考えは、つまらない妄想です。彼女は他のどの人よりもあなたが好きなのです。あなた方はお互いに誤解しあっておられるだけです。お互いに少し善意を持たれるだけで、あなた方はもつ

れからたやすく抜け出せるのです』でも彼は私の言うことに耳を傾けようとしませんでした。急に私の話を遮りました。もし言い続けていたら、彼を興奮させることが私には分りました。だから私はその話題をやめました。でもそれも長くはないでしょう。私の言うことに耳を傾けさせますわ」

後になって彼女は、ブランチが本当に「約束を取り消し」、彼女の家に住みに来ようとしなくなった、と書いてきた。ひっきりなしにドレスを試着しており、ヴィヴィアン夫人の家においてはこうした聖なる儀式と礼拝を司る高位の司祭の殿堂から不便な距離に置かれることになる、というのが理由として挙げられていた。「でも私たちは彼女と毎日会っています」アンジェラは言った。「そして母はいつも彼女と一緒にいます。彼女は私より母の方が好きです。母は彼女の話を一っぱい聞いて、自分から彼女へはほとんど話しません。私たちだけの時、私はどちらでもできません。彼女が何を言っているか私は知りません。つまり母の言っていることという意味ですが、ブランチの言うことについては、私は自分で聞いたかのように分ります。ラブロック大尉はまったく見かけません。ブランチは大尉のことを二日間まったく話していない、と母が教えてくれました。母はこれが良くなった兆候だと思っていますが、私はそれほどの確信はありません。かわいそうなライトさんは、彼が予言したようにブランチがふるまうのを大勝利として扱っています。他から絶対に満足を得られないので、このことから得られる満足を彼は歓迎しています。あなたの通信員の社会は、彼の精神にとって、彼が期待していたらしい癒しの場ではありません。そしてこれは、彼に対して私が自分のできうる限り優しく思いやりがあったという事実にもかかわらずそうだったのです。彼はとても静かです。時として、十分間何も話さないで座っています。本当に、これは楽しくありません。時々彼は、先日私に言ったようなばかげた考えをぶちまけようとするかのように、私を見ます。でも彼は何も言いません。その時私は彼が私のことを考えていないことが分ります。彼はただブランチの

ことを考えているのです。彼が彼女のことを考えれば考えるほど、事態は良くなるのです」

「大切なバーナード」彼女は次の機会に書きはじめた。「退屈やいろいろであなたが死にかけておられなければいいのですが。こちらでは、事態はますます進展しています。昨日彼はルーブル^⑩へ一緒に行きましようと私を誘いました。そして私たちは半時間、絵画の間を巡りました。私がこんな類のことをしているのはとても変だと母は思っています。そして母は、すべてのことの中で大義をとってもおもしろいと思っていますが、この大義が手段を正当化できるほど立派なもののかについては確信が持てないのです。手段が非常に風変わりなのは私も認めます。そしてルーブルに関するかぎり、その手段はうまくいきませんでした。私たちは両腕をなくした大きなヴィーナス^⑪を十五分ほど座って見ていましたが、彼は一言も喋りませんでした。何と言ったらいいか彼は分らなかった、と思います。別れる前に、彼はあなたから便りがあるか尋ねました。『はい、あります』私は言いました。『毎日』『それで彼は僕のことを書いてきますか』『まったく書きません！』私は答えました。彼はがっかりしたと思います」実際バーナードは、アンジェラに手紙を書く時、ほとんど彼の名前に言及しなかった。「彼はここに二日も来ませんでした」彼女は一週間の終わりに続けた。「でも昨晚、大変遅くに、訪問としては遅すぎる時間に、彼は入ってきました。母はもう客間を離れていて、私が一人で座っていました。私たちが危機に達したことが、私にはただちに分かりました。最初私は、ブランチが彼の予言を実行したと言おうとしていると思いました。でもまもなく、厄介の種はこれではないことを知りました。おまけに私は、母が彼女をびったりと見張っていることも知っていました。『僕はどうしてこんなに頭の鈍い愚か者でありえたのでしょうか』部屋に入ってくるなり、彼は言い出しました。『あなたがそう言われるのを聞くのは好きです』私は言いました。『あなたがこれまでともかく賢明だったとは、私には思えませんから』『あなたは賢明さ、優しさ、如才なさのもっとも完璧な

形です！』彼は続けた。正直な歴史家として、彼が私にたくさんのお世辞を言ったことと、一週間彼が私に退屈な思いをさせるのを許してくれたことに、彼がこの上ないお世辞を言って感謝したことを、私はあなたに言わなければなりません。『あなたは私に退屈な思いなどさせておられません』私は言いました。『あなたは私に興味を起こせました』『そうです』彼は叫びました。『偏執狂の奇異な例として。そうおっしゃるのはあなたの優しさの一部です。しかし僕はあなたを死ぬほど退屈させたことを知っています。そしてあげくにあなたは僕を軽蔑されている。あなたは僕を軽蔑せざるを得ないのです。僕は自分を軽蔑しています。自分は男だと僕は以前思っていました。しかしそれは諦めました。僕は哀れな奴なんです！ 自分は物事を静かに受け取り、それらに勇敢に耐えることができる、とっていました。しかしできないんです！ もし恥というものがなければ、僕はここに座ってあなたに向かって泣くところです』『私のことは気になさらないで』私は言いました。『私が批判的にならないというのが、私たちの合意の一部ですわね』『私たちの合意ですって』彼はぼんやりと繰り返した。『あなたはお忘れになったようね』私は答えました。『でも、それは大事なことでありません。私があなたにお話ししたいのはそのことではありません。それがあなたにまったく良いことにならなかったのも、いっそう私はそう思います。私はここ一週間あなたに優しくしてきました。でもあなたは、始めとまったく同じように不幸です。実際あなたはむしろひどくなっている、と思います』『神よ許したまえ、ヴィヴィアンさん、僕もそう思います！』彼は叫びました。『神様はあなたをたやすくお許しになるでしょう。あなたは道を間違えているのです。あなたから逃げ去ろうとしている幸福に追いつくために、あなたは別の道を取らなければなりません。ランチと同じ方向に歩まねばなりません。あなたは妻と離れてはなりません』『ランチの名前を聞くと、彼は飛び上がり、いつもの口調になりました。僕は妻については何でも分っており、何の情報も必要ありません、と。でも私はまた

彼を座らせ、私の言うことを聞かせました。半時間聞かせました。しまいには、彼は興味を持ちました。いかにも興味を持っているという様子でした。彼は座って私を見つめ、とうとう涙が目に浮かびました。私は雄弁だっ
たと思います。自分が何を言ったのか、どう言ったのか、どの点まで吟味に耐えうるのか、私には分りません。
もしあなたがそこにおられたら、私心のない批評家としてのあなたの目に、それがどう辻褃が合うのかも分りま
せん。でもしばらくすると私の目にも涙が浮かんだのは分ります。私は彼に、ブランチを諦めないでと頼みまし
た。彼女は見た目ほどは愚かではありません、彼女は扱いに繊細な注意を払うべき女性であって、本当のところ、
何をしようとも彼女は彼のことだけを考えています、と彼に断言しました。彼女にとって彼は善良さと優しさそ
のものでした。私にはそれは分かっていました。でも彼は彼女のことを主に可愛い子猫と見ていたことを、最初
から隠すことができませんでした。彼女は子猫以上になりたいと思い、浮気に逃げ込みました。しかしその理由
はただ、彼の嫉妬心を刺激し、自分のことを彼に強く思わせるためだったのです。彼は強く感じました。そして
今では強く感じています。彼は情熱的に感じました。それが私の言いたいことでした。でもおそらく彼は、彼女
のあのかなり近視眼的な小さな心の目に、それをはっきりと見せませんでした。そして彼は、彼女の心の痛みと
なり心を苦しめるにちがいないようなことを、彼女に想像させました。『あなたは彼女に』私は言いました。『あ
なたが私のことを思い続けていたと想像させました。そしてあのかわいそうな子は私に嫉妬していたのです。私
には分かっています。でもそれは、彼女自身が言ったことから分かったものではありません。彼女は何も言いま
せませんでした。彼女は誇り高く、思いやりがあるのです。あなたがそれを彼女の名誉になると思われなくても、私は
そう思います。この一週間彼女には言う機会が毎日ありましたが、私には一つの意地悪もしませんでした。私は
それを評価し、理解しました。そして大変感動しました。ライトさん、きっとあなたも感動なさるでしょう。私

がロングヴィルさんと婚約したと聞いて、彼女はとてもほっとしました。それなのに、まったく同じ時にあなたは抗議し、非難し、彼女についてあんなひどいことを言っておられたのです！彼女の外見のことは私も分かっています。彼女は称賛が好きなのです。でも彼女が今もとても嬉しいと思う称賛は、あなたからのものです。彼女がラブロック大尉と遊んでいるのは、子供が木の道化^③で遊ぶようなものです。彼女が紐を引くと、彼は手足を上げるのです。彼女が彼と駆け落ちしようなどと考えたとしても、それは少女がボール紙の黒人人形と駆け落ちしようと思うようなものです。あなたが素直に話し合えば、ブランチは人形などすぐさま窓から投げ捨てるでしょう。お願いですから、私のことをお考えください。どんな悪いことをあなたが私になさったのか、どんな親切を私が必要ならなとお思っていますか、どんな悪いことをあなたが私になさったのか、どんな親切を私が必要なにして差し上げたのか、私には分らないのです。あなたは私のすべてをご覧になりました。もう申し上げます。私には何もすばらしいところはありません。バーデンであなたが私のことを悪くお思いになったことについて、私は何も知りませんでしたし、私にもしもしていませんでした。たとえ気にしていたとしても、私がどうやってそれから回復したかお分りでしょう。ねえライトさん、あなたが私を信じてくださるだけで、私たちは良い友達になれるのです。彼女はとても美しく、魅力的で、誰からも称賛されています。たった今あなたは私を飽きさせたとおっしゃいました。でもそれは、あなたが私におっしゃった様々なお褒めの言葉にもかかわらず、私があなたを飽きさせたのに比べれば何でもありません。彼女がそれを、つまり私があなたを飽きさせたことを知ることができたなら！私があなたのお心にいないことを彼女に半時間見せてください、後は自然に成っていくでしょう。彼女は私とたやすく言い争いができたでしょう。私に対する彼女の態度は、私がこれまでに見たもっともすばらしいものでした。そして私が彼女に常にどう接するかをあなたにご覧にいれましょう！私があなたを飽き

させなかったと礼儀から言う必要がある、などとお考えになる必要はありません。それはまったく必要ありません。私とおつき合いされてがっかりなさったということを、あなたはご存じです。私も最善をつくしました。それは正直に断言できます！』しばらく彼は何も言いませんでした。それから私がとても賢いと言いました。しかし彼は私が言うことに意味のある語は見出せませんでした。『つまりそれは』私は言いました。『私の話の取り柄は、あなたが思い描こうとお思になったものより小さい、ということの証にすぎません。でも、いずれにしても私はあなたに良いことをして差し上げましたわ。私の言うことに反対なさいませんように。あなたはまだお分りではありません。そして私たちがそれを議論するには遅すぎます。明日おっしゃってください』

第三十章

パリにおける事態の推移についての先ほどの報告を受け取って三夜ほど後に、バーナードはストランド^⑤から出て劇場の一つに入った。亡命生活の重荷は、それでもなお日が経つにつれて彼に軽くのしかかっていた。彼は陰鬱な思いで、十一月の霧、夜の闇、押し合う群衆といったロンドンの様々な濃密な媒体の中を進んでいた。落着かず、ただ歩くことしかできなかった。十二枚もの手紙の中であれほどの美点を見せたすばらしい娘の魅力に屈するという罪を犯したとしても、こうして何日も苛立ちと喪失感を抱いて過ごしたことでその罪は十分償われた、と彼は千回も独りごとを言った。彼は劇にほとんど注意を払わなかった。彼の思いは他にあり、その思いがうつろっている間、彼の目は劇場の周りをさまよった。突然、向こう側に彼はラブロック大尉を見つけた。大尉はオーケストラの真後ろの特等席に座っていたが、バーナードの見間違いでなければ、彼と同じように大尉も舞

台にほとんど注意を払っていなかった。なるほど目は舞台に向けられていた。頭は少し傾けられ、立派な髭はシャツの胸の広がりの上で波打っていた。しかしバーナードは、大尉の目が重々しく光沢がないこと、大尉が女優たちを見ていたにもかかわらず彼女たちの魅力が彼には意味を持たないことを見抜くのには時間がかからなかった。自分と同じように、ラブロックにもその男らしい胸に考えるべきことがある、とバーナードは見取った。そしてプランチのどっしりした伊達男もまた別離の思いに苦しんでいる、と彼は結論を下した。ラブロックは一晩中同じ姿勢で座っていた。彼の想像力が劇に投影されていないことは、幕間にも彼が同じように鈍い目で幕を凝視していたことで明らかだった。バーナードは邪魔をするのを控えた。我々も知っているように、バーナードは今人につき合いたいと思っていなかった。そして彼は大尉も同じ思いだろうと判断した。彼自身の場合に作用した原因よりもっと重大な原因が、大尉が突然ロンドンに現われた事実の底にあるにちがいはなかったからだ。しかし劇場を出ようとした際、扉の近くのホールの群衆によってバーナードは足止めされた。通りに広々と開かれたその扉のあたりは、騒乱と混乱の場となっていた。群衆は雨に外出し、寒々とした湿気がストランドの薄暗い喧騒と混じり合っていた。とうとう、外へ出ようとして人々の圧力に押され、我々の主人公は、すぐ横を歩いて、ラブロックと接触せざるをえなくなったことに気づいた。同時にラブロックも彼に気づいた。一瞬彼を見て、顔をそむけた。しかし次の瞬間、大尉はふたたび視線を戻した。そして二人の男は不明瞭で表現に乏しい叫び声を上げた。その声は、アングロ・サクソン族の紳士の間では、さらに鋭い自意識の瞬間に挨拶のしるしとして通っているものだった。

「おや、君はここにいたのか」バーナードは言った。「パリにいますと思っていたのに」

「そうさ、僕はパリにいない」ラブロックはいくぶん素っ気なく言った。「獣の穴に飽きたのさ」

「そうか、分った」バーナードは言った。「失礼して傘をさすよ」

彼は傘をさした。そして次の瞬間、傘の下から彼は、大尉が辻馬車の前の席から二本の指を振っているのを見た。ホテルに戻ると、ゴードン・ライトの筆跡で宛名が書かれた手紙がテーブルに置いてあった。この手紙は以下のようなであった。

「君は僕を馬鹿にしていると思う。後生だからパリに戻ってきてくれ！ G・W」

この短い言葉を、戦争のさらなる宣言と取るべきか和平の提案と取るべきか、バーナードにはよく分からなかった。しかし彼は時を逃さず、その手紙が伝えている召喚に応じた。翌朝彼はパリへと出発し、夜には、旅の埃をぬぐい夕食を急いで飲み込んだ後で、ヴィヴィアン夫人のドアを鳴らした。夫人と娘は歓迎の意を表した。私はそれが彼を満足させたとは言わないが、少なくともそれは、別離の未だ癒えない痛みを鎮めるのに役立った。

「それでゴードンのニュースは何ですか」彼はまもなく尋ねた。

「この三日間彼にお会いしていません」アンジェラは言った。

「バーナード、彼は泊りました。そうにちがいありません。アンジェラがすばらしい活躍をしました」ヴィヴィアン夫人は声を上げた。

「母がランチといるところを見せたかったわ」娘は微笑みながら言った。「まったくすばらしかった」

ヴィヴィアン夫人も優しく微笑んだ。

「可愛いランチ！ ラブロック大尉はロンドンへ行きました」

「そうです。彼はそこを獣の穴と思っています。ああ、いや」バーナードはつけ加えた。「僕は間違えました」

しかしそれはほとんど問題ではなかった。その晩遅く、自分の部屋に帰ったバーナードは、火をじっと見なが

ら座っていた。服を脱ぎはじめることさえしなかった。実にたくさんのことを考えていた。そうした熟考のさなかにドアを叩く音がした。次の瞬間ドアはぱっと開かれた。ゴードン・ライトがそこに立ち、彼を見ていた。バーナードは、入りましたと言う前に、その目をしばらく見返していた。ゴードンは中に入り、彼に近寄った。それから手を差し出した。バーナードは非常に満足してその手を握った。この馬鹿馬鹿しいさかいにもう飽き飽きしたというのが彼が最終的に感じたことだったので、このいさかいが終わったことを知って彼は大いにほっとした。

「ロンドンへ行ってくれたのはありがたかった」目にかつての生真面目さをたたえて彼を見ながら、ゴードンは言った。

「僕はいつも君のためにできることをしようとしてきたさ」バーナードは微笑みながら答えた。

「向こうで僕のことを呪っていただろうな」ゴードンは続けた。

「少しはね。君もここで僕のことを呪っていたんだから、許されるよね」

「もう終わったんだ」ゴードンは言った。「君の帰還を歓迎しに来たよ。君に話しておかないと、枕に頭を載せられないように思ったんだ」

「戻ってきて嬉しいよ」依然として微笑みながらバーナードは認めた。「それは否定できない。それに、きっとそうなるんじゃないかと思っていたように君がなってくれて」そして彼は真剣につけ加えた。「アンジェラがきくと僕らを親友同士にしてくれることは分かっていた」

しばらくゴードンは何も言わなかった。そして、とうとう、

「そうだ。その目的のためだったら、僕らのどちらが彼女と結婚してもかまわなかった。もしそれが僕だったら」

彼はつけ加えた。「彼女はきつと君にそれを受け入れさせただろう」

「ああ、それは分らん！」バーナードは叫んだ。

「きつとそうさ」ゴードンは真剣に、ほとんど論争するように言った。「彼女は非凡な女性だ」

「君を僕の親友にしておいてくれる、それはすごいことだ。しかしそれは、彼女が君と君の奥さんの仲を良くすることに比べたら何でもないことだ」

ゴードンは一瞬バーナードを見た。それからしばらく火を見つめた。

「そうだ。それこそあらゆることの中でもっともすごいことだ。男は妻を尊ばなくてはならない。妻を信じなければならぬ。男は妻を娶り、妻を大切にしなければならぬ。特に妻にすばらしいところがたくさんある場合には。先日の僕はひどい愚か者だった」彼は続けた。「自分が何を言ったか覚えていない。非常につまらないことだった」

「弱いことだと僕には思えた」バーナードは言った。「しかし時々馬鹿になるのも男の権利のうちじゃないのか。それに君は決してその自由を濫用したわけじゃない」

「そうさな、僕は終生濫用してきたよ、終生」そしてゴードンは帽子を取った。彼はしばらく帽子の奥を覗き込んでいたが、また視線をバーナードの目に据えた。「だが、一つ言いたいことがある。君が気にしなければいいが。ヴィヴィアンさんについて、僕は自分の昔の印象に立ち戻ったよ」

「君の昔の印象だって」

そしてヴィヴィアン嬢が受け入れた恋人は、少ししかめ面をした。

「つまり、彼女は簡単ではないと。彼女はとても変わっている」

バーナードのしかめ面は、突然ほとんど満面の笑みとなった。

「君は彼女が嫌いだとも言いたまえ！ それで見事に収まるよ」

ゴードンは首を振った。そして彼も少し微笑んだ。

「それは本当ではない。彼女はとてもすばらしい。それにもし僕が彼女を嫌いなら、僕はそれに苦しむだろう。僕が君の妻を嫌うのは具合が悪いだろう！」

彼が去った時は夜がなかば過ぎていたが、バーナードはしばらく目を開けて横になっていた。そしてゴードンの最後の言葉を思い出した時、彼は暗闇の静寂の中で笑い声を上げた。

翌日彼はランチに会った。ゴードンに会いに行ったのだ。はじめゴードンは不在だった。しかしバーナードは妻と十五分ほど話した。どうやら彼女の会話の能力は、これまで起こったいかなることにもほんの僅かでも影響を受けていなかった。

「ロンドンへ行かれて楽しかったですよね」彼女は言った。「ボンド・ストリート[®]へアンジェラのためにダイアモンドを一組買いにいかれたの。何もお買いにならなかったの。お店に行かれなかったの。じゃあ、何のために行かれたの。聞きたがりでごめんなさいね。私にはお世辞を言っているように見えるけど。私は言われないと何も分らないの。私には観察力がないのね。あなたがお発ちになったのは気づいていました。そう、それは大変よく分りました。そして私は、こういう事情ではとても愛だと思いました。あなたの一番親しい友人がパリに着いて、あなたは翌日小旅行に出かけることにするなんて！ あなたが夫をそんな風に扱うのを見たくはありません。夫なら絶対あなたにそんなことはしないでしょう。それに、たとえゴードンのために留まらないとしても、あなたはアンジェラのために留まってもよかったでしょう。女性が受け入れた翌日に、紳士がその愛情の対象か

ら逃げだす、それも誰もが分るような特別な理由もなく、というような怖ろしいことは聞いたことがありません。翌日にはありませんでしたか。でも、いずれにしても早すぎましたわ。あなたがなぜ行ってしまったかを、アンジェラは私にまったく言えませんでした。『転地』のため、と彼女は言いました。魅力的な理由ですこと！でも彼女はあなたのことをとっても恥ずかしがっていました。私もです。とうとう私たちみんなで、あなたを呼び戻しにラブロック大尉を送り出しました。彼と一緒に戻ってこれなかったの。まあ、その方がずっといいわ。たぶん彼はまだあなたを探しているでしょうね。彼は賢い人じゃないから、しばらくその仕事をしていればいいわ。私たちは、彼に何かしてほしいう。彼がいかにもぶらぶらしているのは良いと思いません。でも私としては、あなたがお発ちになっていて良かったです。ヴィヴィアンさんのお宅にたっぷりいました。あなたがいつもそこにおいてお嬢様に求婚しているところを見ると分かっていたら、私はそれほどあそこへ行きたいとは思わなかったでしょう。それは分別のあることとは思えなかったでしょう。あなたがおっしゃることは分かっています。私が分別のないことを避けたいと思うなどと言うのを初めて聞いた、でしょう。それは私が最近持ち始めたたしなみです。あなたがロンドンへ『転地』のために行かれたのと同じ理由ね」ここでブランチはかなりの間話をやめた。そして言い添えた。「そうね、ヴィヴィアンさんの影響ほどすばらしいものは見たことがない、と言わなければなりません。今度こそお母様はがっかりしないでしょう」

次に他の二人の女性に会った時、バーナードは、賢い女性が道徳的責任を負うやり方に驚きました、と彼女たちと言った。

「責任が好きなんです」ヴィヴィアン夫人は言った。「責任が楽しいのです！」

「そうですね」バーナードは言った。「哀れなゴードンをフランチ夫人と仲直りさせたことを、僕なら絶対に気

が咎めたりしないでしょね」

「ブランチについて一言でも悪く言っではいけません」アンジェラは声を上げた。「彼女は小さな奇跡です」

「すべてうまく行きますよ、バーナードさん」ヴィヴィアン夫人は優しく威厳をもってつけ加えた。

「彼女がとても好きになりました」娘は続けた。

バーナードは軽く笑った。

「ゴードンの最終的な意見は正しかったのです。あなたは非常に変わっている！」

「私のことはお好きなだけ悪くおっしゃっても結構です。でもゴードン夫人の悪口は絶対聞きませんわ」

そして彼女はその後聞かなかった。もっとも、この警告に関して与えられた自由をバーナードがどんな程度であれ利用したという記録もない。

ブランチの健康は、彼女自身の説明によれば、二、三日のうちに驚異的に快方へ向かった。しかし彼女の夫はやはり、冬を明るい陽光の下で過ごすのが良いと思っ^ているらしかった。そしてまもなく彼は、ナイル河をさかのぼる旅が完璧に結ばれた夫婦にとって非常に心地よい娯楽になるにちがいない、ということ^で二人の意見がやつと落ち着いた、と友人たちに告げた。この遠征を都合よく成し遂げるために、二人はただちにカイロへ赴かなければならない。そしてこの理由のために、君たちの結婚までどうしても待たなければなら^{ない}とは僕たちは思っ^ていない、ということ^を君たちはきくと理解してくれるだろう。幸福な二人はもちろん理解した。彼らの婚礼は極めて簡素に祝われることになった。しかしたとえ式に出席できなかったとはいえ、ゴードンは妻とともに、結婚の贈り物として、平和通り[®]で買えるもっとも美しい真珠のネックレスをアンジェラのために買った。そしてカイロに着くと、ガイドが出発の合図を出すのを待つ間に、我々の物語において一度ならず言及されたように、相

手にたくさん手紙を書けと要求する一方で、ゴードンはバーナードに宛ててこれまでもっとも長い手紙を書いた。その手紙は、新婚旅行の最中のバーナードに届いた。

* ここに訳出したのはヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の第四番目の長篇小説『信賴』(Confidence 一八七九年) の第二十一章から第二十四章までである。第一章から第三章までは、『英文学評論』第七十九集(二〇〇七年二月、京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会)に訳出した。そして、第四章から第八章までは『文学と評論』第三集第六号(二〇〇八年十二月、文学と評論社)に、第九章から第十四章までは『英文学評論』第八十一集(二〇〇九年二月)に、第十五章と第十六章は『英文学評論』第八十二集(二〇一〇年二月)に、第十七章から第二十章までは『文学と評論』第三集第七号(二〇一〇年十二月、文学と評論社)に、第二十一章から第二十四章までは『英文学評論』第八十三集(二〇一一年二月)に掲載された。底本としては The Library of America 版を使用した。この版は、一八八〇年二月出版のアメリカ初版を再録している。

注

- ① シャンゼリゼー——Champs-Élysées パリのドゴール広場(旧称エトワール広場)からコンコルド広場に通じる大通り。一流の商店街。北側にÉlysée宮(大統領官邸)がある。
- ② 彼が飲み込んでもいいと思う臍物。パイ——the morsel of humble pie that he was disposed to swallow humble pie は、動物(特にシカ)の臍物で作ったパイで、昔使用人に食べさせた。eat humble pie は、甘んじて屈辱を受けるの意。
- ③ 深刻、真剣——原文はともに serious。
- ④ 決疑論者——cynist 特に道徳的な問題に関して、賢いが論理性の薄い論を展開する人。詭弁家。
- ⑤ 一七七六年の独立宣言にいたるまでの、新大陸におけるイギリス軍と植民地軍の戦闘を指しているか。ちなみに、本書の作者ヘンリー・ジェイムズの祖父ウィリアムは、アメリカが独立した直後の一七八九年にアイルランドから渡米し、

主にオールバーニー周辺の開発を手がけて巨万の富を築いた。

⑥ サンクトペテルブルグ——St. Petersburg ロシア北西部、フィンランド湾の奥に位置する同国第二の都市。帝政ロシアの首都（一七二一—一九一八）。旧ソ連時代（一九二四—一九九一）はLeningradとった。

⑦ カルチエ・ラタン——Latin Quarter (F. Quartier Latin) セーヌ川南岸の学生・芸術家が多く住む地区。

⑧ 「あなたはまるで、あなたの妻を終わらせるようにはなされません！」——ジェイムズの『創作ノート』には、ゴードンの妻殺しが暗示されている。本書『信賴』は、ジェイムズの長編の中で原稿がすべて残っている唯一の小説であるが、その着想が『創作ノート』の巻頭を飾っていることもよく知られている。人物の名前こそ違え、ゴードンが不穏な言葉を吐くところまでは、『創作ノート』に見られる着想と実際の小説とは、ほぼ正確に同じ展開をしている。しかし『創作ノート』では、そのあとゴードンの妻殺しが暗示されている。さらには、事態の恐ろしさを知ったアンジェラが「宗教生活に逃げ込む」ことになっている。（*The American* のクレール・ドゥ・サントレの行動を彷彿とさせる。）実際の小説をこのようなグロテスクな結末から救ったのは、作者ジェイムズのアンジェラに対する取り扱い方の変化であった。実際、『創作ノート』における着想は、次の言葉で終わっている。「もちろん、極めて多くの細部について検討せねばならないし、私はまだブランチ「小説ではアンジェラのこと」の性格については何も述べていない。そして彼女の性格こそが最も重要なのだ」作者はアンジェラを、弱い女から、自らの判断に自信をもった強い女へと変貌させた。彼女は、ひとり宗教の世界へ逃げ込むのではなく、これ以後の展開に見られるように、紛糾した事態を自らの手腕で見事に収拾する女性になったのである。

⑨ ソロモンさん——Miss Solomon ソロモンはイスラエル王国第三代の王。在位、前九六一頃～前八二三頃。ダビデ王の子で後継者。通商を振興して経済を発展させ、エルサレムに神殿や宮殿を建設、いわゆる「ソロモンの栄華」を現出したが、国民は重税に苦しみ、死後、国土は分裂した。知者・詩人として知られ、しばしば「ソロモンの知恵」「ソロモンの箴言」の書き手として言及される。生没年未詳。

⑩ 救いの天使——ministering angel（しばしばおどけて）比喩的に看護婦などにいう。「マルコによる福音書」第一章第十三節。

⑪ ルーブル——the Louvre ルーブル美術館。パリにあるもとフランス王宮。一七九三年から国立美術館として利用。

ヘンリー・ジェイムズ『信賴』

- ⑫ 両腕をなくした大きなヴィーナス——the great Venus who has lost her arms 「ミロのヴィーナス」古代ギリシアの大理石製のヴィーナス像。紀元前一三〇〇前一二〇年ごろの作。一八二〇年、エーゲ海のミロ島で発見された。ルーブル美術館蔵。
- ⑬ 木の道化——a wooden harlequin harlequin は commedia dell'arte に登場する道化役の下男。菱形の多色のまだらのはいった衣装と黒い仮面を着けている。英国のパントマイムでは Pantaloon の下男で Columbine の恋人。
- ⑭ ボール紙の黒人人形——a pasteboard Jim Crow Jim Crow は黒人 minstrel ショーの歌（初出一八三五年）の題名から。
- ⑮ ストランド——Strand ロンドンの、サヴォイホテルをはじめとする有名なホテル、劇場、商店が多い大通り。昔はテムズ河岸であった。
- ⑯ 突然、向こう側に彼はラブロック大尉を見つけた。——ヨーロッパ本土でうまくいかなかった登場人物が、ロンドンで見かけられる、という設定は、ジェイムズの他の小説でも使われている。
- ⑰ 二本の指を振っている——waving two fingers この場合、軽蔑のしぐさか。
- ⑱ ボンド・ストリート——Bond Street ロンドンの Westminster 区にある高級商店街。
- ⑲ 平和通り——Rue de la Paix ヴァンドーム広場からオペラ・ガルニエに至る通り。宝石店で有名。